
ヤンでれ...

XXXX

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヤンでれ…

【Zコード】

Z8482K

【作者名】

XXXXX

【あらすじ】

家族思いでやさしい普通の男子高校生桐ヶ谷^{きりがやじょう}将に恋をし、病んでいる同じクラスの義妹、完璧大和撫子の宮代^{みやしろ}静香^{しづか}そんな静香の愛が巻き起こす事件の数々…

アドバイス、感想があつたらぜひひお願ひします。

尚私は全て書き終わつてから見直すので、完結した場合は見直して話数を調整したいと思います。御了承ください

表紙、挿絵書いてくれる人大募集！　もう確実に執筆スピード早くなりますね。「キリッ もしいたらメールか感想お願いします！

ヤンでれ・・・上(前書き)

友達に言われ、ヤンデレを書いてみることにしました。駄文ですが、読んでもらえれば幸いです。

ヤンでれ・・・上

「…兄…きて」

「ん~、あと3分…」

誰かが体を揺さぶつて起しゃうとしているのがわかる、しかし体が眠いせいか、寝ぼけている桐ヶ谷^{きりがやしょく}将^{まさ}の脳は睡眠を優先させ、拒否の反応を示していた。

「起きてく……」

おかしい。

将は寝かけていた頭をできるだけ早く回転させた。何かがおかしいのだ、そう、いつもとは何かが違っていた。何が違うのかははっきりとしないが、何かが違う。

既に頭で考えていたひに頭がだんだん覚めていき、そしてあることに気づいた。

声が違う

いつも自分を起こしているのは弟のはず、なのに、今自分を起こしているのは透き通るソブリノ^{ソブリノ}のような声、つまり女の声。そこまでぬづくと将は田^たは完全に覚め、田^たを開けた。

するとびっくり、田^たの前にまだ一人でもない美少女の顔があり、徐々に近づいてきてくる。

「うわあああー！」

将は大声をあげると、ベッドの布団から飛び出し、背中が壁に付くまで全力で後退した。

「ななな、なにやつてるんだよ静香ー！」

田の前で四つん這いになつて迫つてきた彼女の名は、富代 静香（みやしろ しづか）、とんでもない美少女で、姿は腰まで伸びている漆黒の黒髪、小さい人形のような愛らしい顔、完璧すぎるプロポーション、雪のように白い肌、現代ではありえないほどの大和撫子だ、しかも成績は常に満点、スポーツ、武術などもでき、もはや弱点などない完璧超人、学校にはもちろんファンクラブも存在する、女子、男子、教師合わせて9割以上が会員というものは巨大組織だ。将の父の再婚相手の連れ子で、一週間前くらいから桐ヶ谷家に住んでいる、しかし婚姻届を出す前日に父が交通事故で死んでしまい、正確には他人で同棲の形になる。

なぜ同棲の形で居座つているのかはわからないが、今はそんなことを気にせず、自分の家族だと思つている。

「…あと少しでしたのに…」

自分の口に指を添えながら拗ねたように静香は呟いた。将はそのあまりの可愛らしさと艶めかしさに一瞬見とれてしまつたが、首をぶんぶん横に振ると、すぐにベッドから這い出た。

「着替えるから早く出でつてくれよー！」

顔が赤くなっているのがわかる。これ以上一緒にいると朝の生理現象が発生してしまう、そう感じた将は、扉を指しながら出て行くよひに命じるが、

「お兄様ー。」

「わーい。」

話を聞いていないのか、静香は背中に飛びついてきた。

「わなつしきから抱きつかれ、思わず前に倒れそうになるのを何とか踏み留まるが、そのせいで背中に伝わってくる柔らかな感触をより強く感じてしまい。将の息子が静かに覚醒を始めてしまった。」

「あ、あぶないだろーは、はやく出でけよー。」

「ええ~どうしようかな~」

悪戯好きな悪魔みたいなことを言いながら、静香は抱きつきながら胸などを手で触つてくる。将は必死に振りほどこうとするが、その華奢な体のどこにそんな力があるのか、びくともしない。

「ああ、お兄様、いい匂いです…」

首の匂いを嗅いでいるのか、静香が肩に顔を乗せてきた、首に静香の吐息が掛かり、思わず背中がゾクリとする。しかも女の子独特ないい匂いがし、将の息子は静香に覚醒を完了していた。

「や、やめろ静香」

何かに耐えるように弱弱しく口にすると、静香は将の状態に気が付いたのか、にやりと笑いながら触れていた手を少しずつ下へ移動してきた。

「ば、ちよつ、やめちよつ！」

まづい！

すぐに止めようと静香の腕を掴むが、まるで万力機械のように腕は止まらない。そんな将の焦った様子を楽しみながら、静香はなお手を進め、そしてついにそこへ手が到達しそうになつた瞬間。

「お兄ちやん、朝だよ~」

ガチャヤツという音ともに扉が開かれ、弟の桐ヶ谷 実が部屋の中へと入ってきた。それと同時に一人とも手を止め、実の方へ視線を向ける。

「なにしてんの？ 朝！」はんできるから早く降りてきなさいって母さんが

「ああわかつた、すぐ行くよ」

「うん~。」

実は将に頭を撫でて貰つと、上機嫌で部屋から出て行つた。

危なかつた、もし実が来なかつたら…

そう思つとぞつとする、将は実が来てくれたことに心から感謝し、
安堵した。そこでようやく静香の腕の拘束がなくなつていてることに
気づく。

さすがの静香も弟の前では冷静になつたか。

「服は……後でいいか、静香、先降りてるぞ～」

そう言い残すと、将は一人先に部屋を出て行つた。

そんな様子を後ろから見ていた静香はショックを受けていた。な
にに対して？ それは 、

……なんで？ なんでそんな安心したような顔するの？

そう

……いや……それよりも…

富代静香は

……あの弟に見せた笑顔…私には見せない笑顔

桐ヶ谷将に

……義弟が…憎い…

ヤンデイタ…

^ ^ ^ ^ ^

^ ^ ^ ^

^ ^ ^

「おはよう千鶴さん」

「あら、おはよう将也さん」

コビングに顔を出すと、静香の母、富代千鶴さんが笑顔で出迎えてくれていた、将は挨拶を済ますと、すでに座っている実の隣の椅子に座る。

「お兄ちゃん今朝はお姉ちゃんと向じたの？」

実の純粋な質問で、一瞬びきりとしてしまった。

「えーと、べ、別になにもしてないぞ」

さすがに本物の「」とは言えないな。

「」みんなさーね将也さん、いつも静香が迷惑かけて

適当に話しおを流してくると、まるで何があつたかを語つてくるような言い方をしながら、千鶴さんが牛乳とパンを持ってきてくれた。

「こえ、そんなことなことですよ

本当に結構な迷惑を受けてくるが、母親の手前、笑顔で返答する。

そう、静香との朝の騒動は、一度一度ではなくほぼ毎日続いた。朝、学校、夜、どこにいてもとにかくくついてくる。静香程の美少女に懐かれ、将も最初は浮かれていたが、だんだんとエスカレートしてきており、最近ではなるべくくつつかないようとしていた。

といふか家より学校のほうが大変だよ、主に視線が、

ふう、と小さな溜め息を零しながら、焼き立てのパンに苺ジャムを塗つて齧りつく。サクサクの食感に甘い風味が、朝の疲れを癒してくれているのを感じた。

「おはようございます」

少しあると静香もリビングにやつてきて、いつものように将の隣に座り、母親からパンと牛乳を受け取る。

「千鶴さん、今日は帰り遅いんですか？」

「わづね～、遅くなると思つから夕飯食べてもらひたの？」

「わかりました」

千鶴さんのことはよくわかつていながら、どつかの大手会社の社長をしているらしい、本当ならこんな普通の一軒家でなく、もっとかい家があるのに、なぜここに住んでいる。将にもその理由はわかつていなかった。

「そろそろ出ないとやばいな、実、先に行きな、静香、悪いけど着替えてくるから先に外に出ててくれ」

「うん、わかった」

「わかりました、お兄様」

三人とも自分の食器を片付け、リビングを出た。実は言われた通り一人で「いってきます」と言つて先に行つた。

そして将は制服に着替えるために自室に戻つてきたわけだが、

「…で、なんでお前まで俺の部屋に来るんだ？」 静香

「着替えを手伝おうかと思つて」

なぜか静香まで着いてきました。

「こりない」

「ふ〜」

勝手に部屋までついてきて、不満を言つ静香を追つ返し、急いで制服に着替え始める。

相変わらず得意ではないネクタイ結びに少し手こずりながらも、なんとか紺の制服を着こなし、鞄を持って部屋を出る。

「おまたせ」

玄関で待つっていた静香に軽く謝ると、一緒に家を出る。しかし家を出て数秒、後ろから千鶴さんが追いかけてきた。

「将くん！　忘れ物！」

「忘れ物？」

やついて差し出されたものはお弁当、やつてれば急いでいたせいですっかり忘れてた。

「千鶴の愛妻弁当」

「おわつー」

千鶴さんの一言で、受け取りかけていた弁当を一瞬離してしまい、慌てて持ち直す。

そんな将を見て千鶴さんは口を押さえながら笑っていた、からかわれているのがわかつていても顔を赤くなつてしまつ。そんな自分を情けないと思つ。

「あらあらあらあら、かわいい」

「[冗談はよじてくださいよ～千鶴さん」

「あら、『あなたさー』

「はあ、もういいです。行こう静香…ってあれ？」

千鶴さんにからかわれ、逃げるよつて後ろにいるはずの静香に声をかけたつもりだったが、将の後に静香の姿はなかつた。

「はあはあはあつ」

富代静香は疲れた体を休ませるために、電信柱に手を付き荒くなつた息を整える。

静香は千鶴さんから弁当を受け取るところをじっと見ていた、すると千鶴さんは将に愛妻弁当と言つてわたし、それを将は赤くなりながら受け取つていた、それを見た途端無意識のうちに、静香は走り出していた。

お母様…本気だ…

静香は確信したのだ。自分の母が本気で兄に好意を抱いていることに、何年も家族をやつているのだ、さつきの母の行動が「冗談ではないことがわかる、なぜなら母は冗談などを言つ人間ではないと静香は知つているから。

「嫌だ…」

いくらお母様でも、お兄様だけは絶対に渡さない。触れさせたくない！ でもどうやって？

そんなことを考えている静香の前にアリが一匹、虫の死骸を取り合つていた。そんな光景を静香じつと見ていた。周りから他の生徒が静香を見ているが、静香はアリをじつと見続ける。

すると片方のアリがもう片方のアリをかみ殺し、死骸を運んでいく。これが自然の摂理

弱肉強食。

「…」

静香はそう小さく呟くと、不気味な笑みを浮かべながら、学校への道を歩み始めた。

いつの間にかいなくなつていた静香を追つよつて、少し急いで通学路を進むが、静香の姿は一向に見えてこない。

「どうしたんだろ、静香の奴、先に行くなんて珍しいな…まさか待ち伏せなんてないよな？」

〔冗談で口にしてみたが、後から気づいた。〕

ありえる。

そうだ、相手はあの静香だ、公衆の面前で突然抱きついて来てもおかしくない。将は常に周りを気にしながら学校へと向かった。

「すいません」

「で、遅れた理由は？」

今現在、将は担任の教師、平沢先生にしかられている。まあ結論を言つと将は遅刻したのだ、あまりに周りに気をつけすぎたせいで、門を通つたあとにチャイムが鳴り、おくれてしまったのだ。しかも教室に入った瞬間に静香に抱きつかれ、結局警戒した意味はなかつ

た。

とりあえず抱きついてきた静香をかわし、男子からの殺氣に耐え、今は遅れた理由を問われていた。

「ゆっくり歩いてたら遅れました。」

「そうか、じゃあ廊下に立つてろ。」

遅れただけで？ そう思つた将は反論しようとしたが、先生も静香のファンだつたことを思い出し、あきらめて廊下に立つてていることにした、教室を出るとき、静香が教師をにらみながら鉛筆を折つていたのは将の見間違いではないだろ？

ホームルームが終わり先生が教室から出ていき、将は自分の教室に入った。

自分の席に座ると、右の席に座つている静香からさつそく声をかけられた。

「お兄様！大丈夫ですか？」

「大丈夫って、ただ立つてただけだよ」

俺どんだけひ弱だよ。

「そうですけど」

静香は将に關してだけはすゞい心配性だ、こないだは転んだだけで救急車を呼ばれそうになり、大惨事となつたこともある。なんだ

が情けなくなつてゐる。

「まつまつはー。ちすがだなー将」

「突然なんだよ、明」

今度は左の席から声をかけられた、親友の古河じが明あきらだ。スポーツは何でもでき、勉強もそこそこできる。しかもイケメンで明るいといつて、当然女子からはもててだ。

「いやー朝から笑わせてもらつたよ。まさかおくれた理由がゆつくりきただなんて、くへへ、馬鹿にしてるとしか思えない理由じやねえか」

「本当になんだからしかたないだろ」

まさか静香を警戒してきたなんて言えないしな

「ふーんまあいいや、それより将、お前放課後暇か?」

「ああ、ひ「暇じゃあつません」」

暇だと言つねうとしたら、なぜか話しかけていた静香に返答されてしまつた。将が何か言おうとするが、それを遮るように明が口を出した。

「久々にゲーセン行いつと思つたんだけビ、もうひさすれ代わるも一緒に」

「行きません、あんなタバコ臭いといふ」

基本的に静香はタバコが嫌いらしく、あまりゲームセンターに行きたがらない。「これはおとなしく帰るかな。

そこで終わらかとおもわれたが、明が邪悪な笑みを浮かべながら告げた。

「カッフルで撮る、プリクラもあるんだけぞ！」

「行きますー！ ちょうど今日暇だったんですねー！」

「即答ーー？」

さつきは暇じゃないとかいつてたのに何いつてんだ？ 将は横目で静香を睨むが、静香は気づいていないのか、明と話を続けていく。

「じゃあ放課後

「はー」

結局最後まで何も言えないまま終わってしまった。しかも勝手にゲームセンターに行く約束までされてしまっている。

ま、最近行つてなかつたらしいけどね。

この時は思いもしなかった……まさかあんなことになるなんて……

ヤンでれ・・・中

今は午前授業最後の体育、男子はサッカーで女子はテニスだ。今は教師の先生が説明をしているため、体育座りで座っている、正直男子は皆女子のテニス姿に夢中だ、そんな中先生の話を一人まじめに聞いていると、隣に座っている明が袖をつんづん引っ張ってきた。

「ほえ～やつぱスタイルいいんだな～ 静香さん」

「やつか？」

「はあ？ なにいってんだお前？ 見てみろよ」

そう言われて無理やり顔を掴まれ、テニスコートの方を向かされる。テニスコートではすでに試合が行われており、静香がストレートで勝っていた。

「どうだ？」

「どうだつて…まあ認めるけどさ」

将が静香のスタイルがいいのは百も承知、なにしろ一緒に住んでる上に誘惑してくるのだから、気づかないはずがない。

しかし全てを認めるわけにはいかなかった、もし認めてしまったらすぐにでも静香を好きになってしまふ。兄妹でなくとも、家族だと思っている将は静香を好きになるわけにはいかなかった。

「スタイルや顔が良くても性格がな…」

「いやいや、性格だつていいじゃねえか」

「ぐへ、とにかくー」

「アーリーハウジングー」

ついにカツとなつて反論しようとしたところ先生に怒られてしまつた。将はしぶしぶ謝ると、明を横目で睨み付けた、明も悪いと思つてこるのか、じらりを見て手を合わせていた。

そして自分達がうるさくしている間にチーム分けが終わつてしまつたらしい。将はAチームで明Bチームに振り分けられた。

「えーと」

今までに試合の真つ最中、チームの力も互角なのだが…

「食らえやー」

「死ねー！桐ヶ谷」

「うあえーーー！」

「サッカーじゃねえよー、なんで俺キーパーーー？ といふかなんで

味方までショートしてんだよー！」

「それは当然お前が憎いからこまつてんだろおーーー！」

確かに、もし自分が彼らの立場だったらやつしたかもしねない。

だがそれは彼らの立場だったらの話だ。

「だからって、おわつー。」

説得を試みるが、頭に血が上っているためか、誰も話を聞いてくれない。

そんなとき事件は起きた。

サッカー部エースの嫉妬によつて最速のボールが将に向かって打ち出されたのだ。

ヒュッ

それでもなんとかしゃがんでボールを交わした。

「あぶねえー将

ガツ！

明の声が聞こえた瞬間、頭に強い衝撃を受け、脳が揺れるの感じ、体か後ろに倒れていくのを感じながら、将の目に当たつたものが写つた。

ああ、スパイクか、どおりで硬いと思った。さつきのボールの方がマシだつたのか？

それを最後に将の意識は闇へと落ちた。

「お兄様！！」

静香はすぐに将のところに駆け寄った、将にスパイクが飛んでいくを見た瞬間にテニスコートから飛び出していた。

「しつかりしてくださいーお兄様ー！」

倒れでている頭を持ち上げて、仰向ける。

その時手に何かが触れた。

「え…？」

…血？

…血、血、血

…お兄様の…血…

「いやあああー！お兄様が死んじゃうーは、早く病院にー！」

頭が少し切れて出ただけで、本当に少量だったが、静香の気を動かさせるのには十分量だった。

周りの生徒達は、静香の登場に完全に固まってしまっていた。

「保健室ー！」

そう思った瞬間、持ち上げるために足と首に手をかける。

「大丈夫ですか？ 僕が運びましょう」

そう言いながら手を出してくる男がいた。

ここに、さつきお兄様にスパイクを当た奴

「あ、ずりい！ 僕も運びますよ！」

そういうと多くの生徒が我先にと立候補してきた。そしてスパイクを当た男の手が将の体に触れる瞬間。

「触れるな……！」

「がつ……！」

静香が顔面に蹴りを当て、ふつ飛ばしていた。

「それ以上近づいたら……みんな殺します……」

吹っ飛ばされた男は歯が抜け、白目をむいて気絶している。

本当なら今すぐ全員殺したいところだけど、今はお兄様を保健室に連れて行かなければ

そして将を抱きかかえると、男子を睨みつけ、信じられない速度で保健室に走つていった。

男子は走り去る静香の姿をただ見ていたことしかできなかつた。

「ん……」

将はゆつくりと田を覚ました。

するとそこには白い天井が広がっており、薬独自の匂いが鼻をつんと刺激してきた。

そこが保健室だと気づくのに10秒も掛からなかつた。

「保健室……」

上半身を起き上がらせると、頭に痛みが走つた。

「そいつが、俺は確かスパイクが頭に」

なにが起きたのかを思い出し、傷が付いている頭に手を触れると、誰かに治療されたのか、頭に包帯が巻いてあつた。

「包帯が必要なほど傷が深かつたのか？」

ガシャンッ！

何かを落とした音にびっくりと反応し、扉の方に顔を向ける。

するとそこには静香が立つており、手に持つていた大量の薬品を地面に落として固まつていた。

「静香？」

名前を呼んだ瞬間、静かは田にも止まらぬ速さ泣きつってきた。

「お兄様～～～！！」

「ぐはっー。」

「心配しました～～～！ 死んじやうかと思ござました～～」

腹への一撃に、一言文句を言つてやろうと思つたが、本氣で心配してくれてこることに気づくと、静香の頭に手を置いて微笑む。

「馬鹿だな～こんなことへりこで死ぬわけないだろ、まあでも、あらがとな、静香」

「お兄様……」

頭を撫でてやると、静香は安心したように手を細めた。

「つひいつか、もつ放課後なのか、そろそろ帰らないとな」

頭を撫でながら時計に手を向けると、時間は既に5時を回つたところだつた。しかし静香の方を見ると、小さな寝息が聞こえてきた。

「まつたく仕方ないな……」

しばりへ寝かしておぐか、と思つたが、そこで重要なことに気づいた。

「つ、動かねえ」

静香に抱きつづ形で寝られているため、動きが取れない、仕方ない。

く無理矢理抜け出そうと身体を……

「動かない……」

動かせなかつた。この華奢な身体の何処にそんな力があるのかまったく想像できなかつた。

「頼む静香！ おきてくれえ～」

結局抜け出せたのは2時間後の7時だつた。

学校の見回りに来た用務員に怒鳴られて静香は起きた。

家に帰るときには静香にお姉さま抱っこをされるといつ羞恥プレイを味わうこととなつた。

26

「今日は疲れた～」

帰ってきてすぐに飯を食べ、高速で風呂に入り、現在は自分のベッドでうつぶせになつていた。

「ふあ～、つと、そういえば今日明とゲーセンいく約束してたんだつけ、悪いことしたな」

携帯を取り出し、謝罪メールを送ると、そのまま充電器に携帯を差す。

「そうだ、今のうちにやめておくか

ベッドから飛び起きると机の一番上の引き出しを開けた。

中から取り出したのは匁字型の錠前だ。いつも朝静香が侵入してくるため、前に買つといたのだ。

壁と扉に穴をあけ、輪が付いた金属の板を取り付ける。あとは南京錠で輪同士を通してロック。

「これでOKか」

開かないことを確認すると、そのまま将はベッドに入り、安心して眠りへとついた……

ヤンでれ・・・下

現在夜中の0時、みんなが寝静まつた今、静香は一人、将の部屋に訪れていた。

ガツ！

「？」

しかし、扉を開けようとすると、何かに引っかかる音が聞こえ、開かない。

鍵？でもお兄様の部屋鍵はついてないはず、用心棒。

再度あまり音をたてないよう、数回扉を開けようと試みる。

この金属がぶつかるような音は、錠前ね、この手の扉に仕掛けられるのは南京錠くらいかしら…まあなんにしてもそれなら話は早いわ。

静香は扉を片手で開けようとし、止まつたところ少しずつ力を加えていく。

ギツギギギツ…ガツ

外れた。正確に言うと、南京錠に繋がっていた板が、ネジごと抜けたのだった。しかしネジが潰れかかっているのを見ると、相当の力がかかったのは一目瞭然だった。

「 さて… 」

部屋に侵入し、 静香ことひでの日課を開始する。

その一、お兄様のメールチェック。

静香は毎日一度、兄のメールを確認している。理由はもちろん兄の異性の把握、友好関係である。

「 今日もあいつ以外の人とメールはしていないようですね 」

「 このときのあいつとは明のことである。兄のメールチェックを終えると、次のステップへ移る。 」

その二、お兄様の追加品のチェック。

「 」の追加品とは、将が新たに買ったものならすべてが含まれる。

「 今日はないですね 」

1時間かけて部屋を物色したが、なにもあたらしこのものは出てこなかつた。

静香はノートとペンを取り出すと、今日の日付と×印をつける。

「 」のノートは秘密の将ノートである。将の部屋にあるもの、癖、仕草、好きなもの、嫌いなもの、etc と、将に関する情報が細かくじるされているヤンノートである。

その三、異性の好みチェック。

まあ簡単に言つと、将のもつてゐる18禁雑誌をチェックして、どんな子が好きなのかをチェックするのである。

「ふむ、何も変わつてないわね…」

将の本棚の一番下、漫画の奥に隠してある雑誌を読みながら頷く。その四、お兄様の服を一枚回収して撤収。

いつもして静香の口課が終了する。回収した服は使つたあとに洗つて返しています。

ちなみにこれだけのことをしながら一緒に寝ようとしないのには理由がある。理由は簡単、襲うより襲つてほしいからである。

無理矢理襲つたのでは本当の愛はないと考えている静香は、なるべく自分からは襲わないようこと決めている。

いつもして静香の長い一口は幕をおろす。

……
気配…

「はつ…」

「やあ、うー」

田嶽めどともに邪悪の氣を感じ、枕を前に出すと、迫つていた静香の顔に直撃した。

その隙を逃さずすばやく布団から脱出する。

「むーー、最近どんづん反応良くなつてやつてやつ……」

せつげなく枕の匂いをかいり、恨めしそうな田嶽の匂いをみてくる。

「ふ、こつまでも弱こまの俺だと……つてお前がいつから入つてきたんだよー。」

そこで昨日鍵をつけたのを思に出して聞くと、平然と、

「普通にドアからでる」

言われて扉を見ると、鍵の板が扉にぶつかりながら扉につけていた。

「……お前、もしかして人間じゃないとか？」

「愛の力と言つてください、お兄様」

愛の力で「んな」とができた世界は犯罪もみれになつてしまつだろー。

やんなことを思ひながら、部屋から静香を追い出し、制服に着替えるのであった。

「おはよー」

「おはよう

「おはよー、お兄ちゃん」

コンビングに下つると、千鶴さんと実は返事をしてきてくれた。

食べていたパンを咥えながら、近づいてきた弟の頭を撫でようと手を——

「おはよー」やれこめすー！　お兄様ーー！」

「ぐはーー！」

とした所に静香が体当たりをしつつ後ろから抱きついてきた。

「お、おはよー静香、だから離れてくれ

「や

それだけいふと抱きつ力があがり、背中で頬づりしていく静香。

「やめなさい静香、将さんのが困つてゐるでしょ

千鶴さんが将の分のパンを机に置きながら、静香を注意する。

「困つてなんかいないわ、むしろお兄様は喜んでいるもの」

「ええー?」

将自身が一番驚いている、静香は潤んだ瞳をし、上目遣いでこちらを見上げた。

「嬉しくないの…？」

「いや、まあ、うれしい、かな」

「お兄様大好きー！」

そんな静香を苦笑いで頭を撫でている、千鶴さんが、少し不満そうな表情をした。

「そりいえば将さん、お弁当箱知りませんか？ 将さんのだけ見当たらなくて」

「弁当箱？ おかしいな、昨日出したはずですよ？」

一人で弁当箱の行方を考えている、静香が机の上に、将の弁当箱を置いた。

「今日は私がお兄様のお弁当作りました」

「ちょっと静香、勝手なことはしないで頂戴、私が将くんのお弁当を作つてこるのよ？」

自分の役目を勝手に取られたことがカソに触つたのか、少し怒り氣味で静香に言つた。

「それも今まで結構でお母様、今日から私がお兄様の愛妻弁当を作ります」

「それは許せないわね」

「なにがですか?」

「おーっとなぜだかわからないが、目の前で未だかつてない親子喧嘩が始まらうとしている」

「……」(こは将くんに決めてもらいましょう)

「……やうですね」

「え? 僕?」

二人の喧嘩を見廻けようと思つていた将は、突然自分に矛先が向いて焦る。

「では」

「どちらのお弁当がいいですか? お兄様

詰め寄つてくる一人を見て、どう答えたらいいのかを探し出す。

「どちらも美味しいから交代で作つて、つていうのは……」

「一人はしじまらへ考えたあと

「将くんがそうこうなら…」

「わかりました…」

そういうことで将のお弁当は毎日交代して作る事に決定した。そのとき弟の実に服をくいつと引つ張られた。

「どうした実?」

「遅刻しちゃうよ?」

「うえ?」

言われて時計を見る。学校のチャイムまであと十分。

「やべえ! いくぞ静香!」

「はい! お兄様!」

騒がしい朝の所為で飯も食えず、将と静香は家を出て行った。

家を出てから5分、現在将たちは学校に向かって必死に走り続けている。

「はあはあはあ

「うわあ、走つてゐるお兄様も素敵です……」

そういうながら静香がにやける。

訂正、必死に走つてゐるのは将だけで、静香はバック走行で将の少し前を走りながら、将の顔を眺めていた。

「お前、やつぱ、バケモンだろ、はあ」

「失礼ですお兄様、愛の力と行つてください」

「くつそ――――」

愛の力ってなんだよ！――と思ひながら将は走り続けた。

キーンゴーンカーンゴーン

「昼休みですよ！――お兄様！」

「わかつてゐよ……」

今は昼休み、結果的にいふと将達はなんとか間に合つた。しかしそのかわり、将は昼休みまで爆睡していたのだった。

「さあ――早くお弁当食べてください――！」

「わかつたわかつたよ」

しつこい静香にせかされながら、渡された弁当の蓋をあけ——閉めた

「たまには屋上で食べるか、静香」

「え？ はいお兄様がお望みなら」

「行こう」

そして場所を移して屋上、今日は暑さのためか、誰も屋上には人がいなかつた。

「おい静香」

「なんですかお兄様？」

「これはどうこう」とだ？

そういうつて弁当の蓋を開けると、『飯に大きなハートマークが書かれていた。

「愛妻弁当です」

「恥ずかしいから」つこののはやめやー。」

「えー」

「うな睡れる静香を見て、ため息をつく。

「今日はもつじいにせじよ、つてあれ、お茶忘れてきました」

「あ、じゃあ私取つて来ますので食べてください。」

「いいのか?」

「はい。」

やうこつてすべぐ「静香は屋上から出で行つた。

行つたのを確認してから弁当を開ける。

「まつたく、よく」んな恥ずかしい弁当作れたな~」

あらためて弁当の中身を見て、苦笑しながら一口食べる。

「でもやつぱりぬくや……」

「やうかよ」

ガンッ！

知らない男の声がした瞬間に何かで頭をなぐられ、将の意識は一瞬で闇へと落ちた。

静香は現在将のお茶を教室から回収し、屋上への階段を登つてい
た。

「たべてくれてるかな～」

将の食べている姿を想像しながら屋上の扉を開ける。

「お兄様！ 食べて…」

そこで静香の言葉は切れた。そこには将の姿がなかつたからだ、
あつたのは、ぐしゃぐしゃになつた弁当箱と、一枚の紙。

“市外の廃棄工場跡地で待つ”

そこで静香の考えたことは大好きな将の安否よりも先に違つこと
を考えていた。

ああ…この人を殺さないと…

「つづ…」

将は見慣れない工場の中で目を覚ました。身体を動かそうとした
が、縄で縛られていた。しかも後頭部が痛い。

そこで自分が連れ去られたのを思い出した。

「 ょお、 田え覚めたか？」

「 お前は、 サッカー部の…」

「 そ、 安部武光あべたけみつだよ、 お前にスパイク当たった」

将の田の前に現れたのは20人ほどの見た田暴力団と、 サッカー部のエースの安部だつた。

「 なんでこんなことを」

「 ああ？ 何言つてんだ今更、 わかつてんだろ、 お前を使って富代静香をおびき出すんだよ」

「 どうして？ がつー！」

そこで頭を蹴られた、 後頭部にも響いて痛みが半端ない。

「 どうしてもくそもあるか！ あの女、 おれが何回もアタックしてやつても全部シカトしやがつて、 しかも顔まで蹴られちや黙つてられるか… 少し可愛がつてやる」

「 そんなこと… すぐにバラして…」

痛みで気絶しそうなのを絶えていると、 安部が高らかに笑つた。

「心配後無用、ばれねえよ！ 全員でやつてるといひを[印]メで取つておけばなあ」

「下衆が…」

「ぐ、いつてる、お前にはひやんと見学をせいやるから安心しな、そうだな、お願ひしたら一回やつしてやつても…がつ…」

全て言い終える前に頭で顔面に頭突きを決めてやつた。頭が痛いが関係ない

「それ以上喋るな…！」

「ぐつ、てめえ！ おい、こいつやつちまえ…」

「がつ、ぐふつ…」

周りにいた暴力団5人に殴られ、蹴られる。

「つたぐ、おい、氣絶させない程度にしとけよ」

あらかた殴られると、もはや痛みをあまり感じなくなつていた、感じるのは口の中に広がる鉄の味。

「ちなみに助かるなんて思わないほうがいいぜ、ここのは暴力団コンドルの本拠地だからな、ちなみに外にはまだ30人程仲間が見張つて…」

ドガアアアン！――！

そのとき工場の巨大な鉄の扉が吹き飛んだ。

そのあまりの衝撃にあたり一帯が砂埃で見得なくなる。

「！」ほつ！ なんだ！ どうした！』

そして砂埃がやむと、そこに立っていたのは、返り血を大量に浴びた、静香の姿だった。

「富代静香？ 外の奴らはどうした！」

「み、みんな血だらけで倒れます！」

「な、なんだと…？」

部下の報告を受け驚いている阿部に静香が頬についた血を拭いながら告げる。

「大丈夫、みんな死んでない、ただ通してくれないから痛い目に合わせただけ」

そのまつたく表情の読み取れない静香に恐怖した安部は、焦ったように部下に命令をだす。

「ぜ、全員で掛けえ！」

鉄パイプや、バットをもつた男が20人で静香を取りかこんだ。

「やつちまあえー！」

「つおひりあー！」

3人ほどが静香に殴りかかつたが、それを指で受け止めると、二人を蹴り飛ばし、一人をバットごと壁に叩き付けた。

「大丈夫、あなたたちは殺さない」

そういうながら一人、また一人次々と殴り倒していく、ついに最後の一人が血を吐いてふつとんだ。

「やつと、あなたの番」

そういうながら無表情だが、確かに怒りの籠もつた目で阿部を見据える。すると安部は倒れていた将の首を持ち上げた。

「あぐつー。」

「つー、また富代ー！ こちには人質がいるー！ おとなしくしろ！ さもなー！」

「ズッ！」

言い終える前に、静香が投げた包丁が安部の腕に突き刺さつていた。

「うでがああああーーーー！」

「五月蠅ーーー！」

ドンッ！

続いていつの間にか近づいていた静香が、安部の腹を蹴り飛ばしていった。十メートル近く飛んだのち、瓦礫の中に突っ込んでいった。

そして倒れ掛かっていた将を抱きとめ縄を切ると、静香は近くに落ちていた鉄パイプを足で拾いあげると、安部の前に立つた。

すでに氣絶している阿部は、ただ倒れているだけ。そんな安部に向かって静香は鉄パイプを思いつきり振り上げ告げる。

「死ね」

「まで、 静香」

下ろすとひるで、 静香の前に立ちふさがった。

「待たない、 殺す」

「もういいんだよ」

「良くない！」

そこで静香が声を荒げた。

「そいつはお兄様にこんなひどいことをした。たとえお兄様が許しても私が許さない！！」

「確かに俺もこいつは許せない」

「だつたらー！」

「どうしてー？　どう前に静香の肩に手を置く。

「でも…俺は家族が…大切な静香が人殺しになる方が、もつと辛いし。嫌だ」

「でも…でもお」

静香は鉄パイプを振り上げまま、涙を流していた。そんな静香が愛おしくて、無意識に抱きついた。

「ありがとな、静香。こんなに思われて、俺は世界一幸せな兄貴だ」

そう言つた瞬間、静香は鉄パイプを離し、緊張の糸が解けたように将の胸の中で泣き続けた。

その後、警察と救急車を呼び、将達は別の病院へ行つた。将は頭の傷がひどいため一週間の入院を言い渡され、現在も医療中だ。

「お兄様～愛してます～」

「わ、こらやめろ静香ー！」

あの事件以来ますます静香のスキンシップは激しくなつてしまつた。しかし、やはり誰かが傍にいるのは安心する。

「将くん、お見舞いに来たわよー」

「あたよ~」

やつこつてお菓子を持つて病室に入つてくる千鶴さんと窓。

そして将の隣に座ると、千鶴さんはお菓子を口に運べどいた。

「はい、清人さんあ~ん」

「え~と」

「がう~.」

反応に困つていると、抱きついていた静香が千鶴さんのお菓子に
食いついた。

「なにするの静香~.」

「ふん~.」

そしてこつものよつて~一人の喧嘩が始まる。

「はあ

「お兄ちゃんお兄ちゃん」

そんな二人を見つめると、実がお菓子を持つて近づいてきた。

「あ~ん」

「あ~ん」

「美味しい？」

「おお、皿にどぞ」

弟の差し出されたお菓子を食べ、頭をなでると、うれしそうに笑う。それに気づいた一人が怒鳴り声をあげる。

「「あ――――するい!」」

(やつぱり、実に見せるあの笑顔…ズルイ)

そんなことを思つてゐる静香など知らない将は、これからもずっとこんな日が続くことを節に願つていていた。

震・ヤンヤれ…出念こ…

「やつと帰つてきた…」

やつこながら大きなボストンバッグを持った女の子が、電車から見える街を眺めていた。

「待つててね…将棋…」

将 saide

「い、行つてきます…」

「行つてきます」

あの事件から一週間、病院から退院した将は、いつもどおりの生活へと戻っていた。

そう、いつもどおりの生活こ…

「なあ 静香…あの朝のあの起こし方はなんとかしてくれないか?」

いつもどおりとこ…とは、毎朝の女難も変わらないわけで…つまり現在も将は、静香の朝の起こし方に大きな不満があるというわけだ。

といふか朝から繩をもつてベッドの隣に立たれていたら、誰だつ

てやうなるだらう。

そして現在登校時間を利用して静香にそのあたりの件を説得して
いたわけだが、なんだか静香の先ほどから様子がおかしい。いやい
つもおかしいんだけど。

「つて聞いてるのか静香？ セツキからやたら周りを気にしてるみ
たいだけぞ」

「……」

セツキからしきりに周りを警戒している義理の妹を見ながら、将
も気になって辺りを見渡すが、特に変わった様子は見当たらない。

「なあ、どうしたんだ？ いつも以上に頭の調子悪いのか？」

しかし静香は将の言葉に反応せず、今だ「」箱や電柱などをやた
ら気にしている。

……やっぱり頭の中でも壊れたのだろうか？

そんな失礼なことを考えながら、将は静香の肩を叩く。

「おい、大丈夫か？」

と声をかけた瞬間、

「ー セツキーー。」

静香は振り返りながら将の後ろの「」捨て場に向かつて包丁を投

げつけた。

「……つておい！ 突然何してんだよ！ つてか何でそんなもん持ち歩いてるの！？」

突然のことに心臓をバクバクさせながら静香の両肩を掴み怒鳴りかかるが、当の本人は包丁を投げた所を見て咳ぐ。

「逃げたか…」

「お前はどこの暗殺者だ…」

「誰かいたのか？」

将が後ろを振り向き、包丁の突っ込んでいたところをみると、「ミニ袋の間から、『そ』そとネ』が飛び出してきた。

「なんだよ、猫じゃないか」

「お兄様、落ち着いて聞いてください」

「またぐ」と続けようしたら、静香に両手で顔を両手で掴まれ、ゴキッという嫌な音をたてながら、無理矢理顔を正面を向かせられた。

「まずはお前が落ち着け、首にヒビが入つまつ」

「じゃないよ取れちやうか僕の頭。」

将は掴んでいた静香の手を払い、首を優しく揉み揉みとほぐす。

「んで、なんだつて？」

真剣な表情でこちらを見つめる静香の表情に、周りの空気がちらりと圧迫されてような感覚が辺りを包みこむ。

そして静香はゆづくりと告げた。

「お兄様は狙われています」

■ ■ ■ ■ ■

「は？」

「狙われています」

さりげなく聞き返してみたが、同じ口調で返されてしまった。

「ええと、一応聞くけど…誰に？」あ、もしかして親衛隊の奴らか？」

その可能性が一番高いだろう、またこないだみたいな奴が現れるかもしねえ。

いつやあいわれからぬ、俺もむかし氣をしつかり引き締め

「お兄様を狙う雌のゴキブリの匂いが…」

「 てーつて、あれもつ一度いいか？ 静香？」

「だから、お兄様を狙う、黒いテカテカですよ」

ちゃんと聞いててくださいよ、みたいな感じで怒られてしまった。

あ～、やうか～、ゴキブリか～……

「はあ」

聞いた俺が馬鹿だった…

とりあえず小さな溜め息を一つ零し、静香を置いて学校へ早歩きを始めた。

「待つてくださいお兄様！ 本當なんです！ 昨日の午後七時十三分八秒、お兄様がお風呂で髪を洗っているときにこの市に入つて…」

だからお前はどこに暗殺さよ

「つてちょっとまで！ その時間云々の前になぜ俺の髪を洗つている時間がわかる…！」

しかも秒単位だと…？

「そんな当たり前のことまでひどいことです！」

「どうでもよくないよ…？ ちよつとまで…」

プライバシーは大切だよ！

結局その後も口論しながら一人は学校へと向かつたのだった。

「おい、朝から大丈夫か？」

将の数少ない友人である明が、心配して声をかけてくれた。

「ああ」

「そういえば静香さんは？」

「ん」

将は身体を机にのせ、顔を伏せたまま指だけ扉を指す。

明は指のさした方向を目で追つていいくと、妙な光景を目にした。

「…なにやってんだ？ あれ

あれ、というのは、扉の死角から入つてくる生徒を一人一人確認している静香のことで間違いないだろう。

「なんか知らないけど見張りらしい」

「なんの？」

「『キブツの』

「はあ？」

答えを聞いた明が分けがわからないという顔をしている。当たり前だ、実際将にも静香が何を言つてゐるのかまったく理解していないのだから。

キーンローンカーンローン

チャイムがなつたため、ドアの死角に隠れていた静香が将の隣の席へと戻ってきた。

しかしそまだ諦めていないのか、その表情は未だ険しくドアを見つめている。

「んで？『キブリはいたか？』

「いえ、けどもひまじまで来てます……」

まだ言つた「イツ、と考えたといひで、ガラララシッヒドアが開かれ、誰かが入つて来る。

まさか……本当に！？

「席についてるか～」

入つて来たのは独身男教師武山三十一歳だった。

「武山、」キブリ？

「…来ます」

「へ？」

そんな馬鹿なことを考えていると、静香が小さくつぶやいていた。
その目には殺氣に近い熱が籠つている。

「え、今日はめつさ可愛い、といふかみんなが知つてゐる有名人が転校してきたぞー！」

いつもテンションの低い武山が、珍しくテンションが高い上、かなりの美少女という言葉に、クラスの男子全員が騒ぎ出した。将以外は

「では、入つてください」

なぜ丁寧語

ガラツ

教師の声と共に再びドアが開かれ

静香が飛び出した。

ヒュツ

転校生の足が片方ドアの敷居を跨いだ瞬間、静香はその人物に向かつてとび蹴りをかました。

「」の衝撃的光景に将の思考は一瞬止まつたが、静香の身体能力は暴力団を壊滅せらるるものだと思い出すと、すぐに血の気が引いた。

「お、おい！ 静香…！ 何やつて！」

「ちつ…」

しかしそこで更に信じられない光景が目に入った。

あの静香が弾き飛ばされた。転校生はドアの向こう側にいるためどうやつたかはわからないが、静香を教卓の方に吹っ飛ばしたのは見てわかつた。

静香は舌打ちしながらも回転しながら教卓の横に着地し、置いてあつた新品のチョークを6本、信じられない速度でドアの向こう投げつけ、動きを止めた。

「突然」挨拶ですね

ドアの向こうから転校生の声と共に、碎かれたチョークが投げ捨てられる。

「…あなたは排除しなければなりません」

「あら、なんですか？」

「決まつてゐる、あなたはお兄様に書を『』える『』キブリ、『』みつりする前に潰す」

クラスメイト達はこの意味不明の状態を黙つて見ていた。教師の武内は、教室の端っこでブルブル震えている、とても頼りにならない

「ヨキヨリって転校生のことだったのかよ

「そうですか、ですがちょうどよかつたです」

そこまで言つと転校生がついに教室に入ってきた。

「ちょうど私も、将君に憑いた寄生虫を取り除かなきやいけないか

「う

そう言いながら入つて来た美少女は、将の幼馴染である、新崎凜であった。

麗・ヤンされ 無理

「初めまして、新崎 凜です」

そう言しながら凛は礼儀正しく頭を下げた。まるでさつきの出来事が嘘かのような見事な立ち振る舞いだ。

「えへ、ではとつあえず、質問がある奴は手をあげる」

「はへー」

少し凛から距離をとつながら教師が言つた瞬間、男子達が一斉に手をあげた。

「では荒井」

「はーー！ なんでアイドルやめたんですか？」

気づいていなかつたが、凛は「TENSHI」という大人気アイドルだつたらしい。なぜか昨日やめてしまつたらしく、会社も困つてこりとこり。つ

そりやあ困るわな。

「将くんに寄生虫が付いたからですか」

寄生虫とまあそりやくとこつかまほ確定的に静香のことだから、ちあやう言つてたし。

「い、一応聞きますが、その、好きな人は……」

「いませんよ」

その一言にクラス全員が沈黙した。

そして次の瞬間にわっと男子達が騒ぎ出した。

「そのかわり、愛してる人はいません……」

男子達が倒れた……

「どうせ、『キブリ』でしょ……」

となりから静香の恐ろしい一言が聞こえた、明らかに不機嫌な顔をしていらっしゃる。

「寄生虫はだまつてください」

どうやら聞こえていたようだ。なんという地獄耳。

睨み合つたりの間に、すさまじい殺氣が激突しているのが、目にうつりそうなほどよくわかる。

「じゃ、じゃあ質問はこれくらいにして……新崎の席は……」

「先生」

先生の声を遮つて凜が発言する。

「私、将君の隣が良いです」

しかしすでに将の隣には、静香が座つており、一番後ろの席なため、となりは静香の席しかない。

「しかし、そこにはすでに富代が……」

「関係ありません」

そう言つて静香と凛が黙つて先生を威嚇しはじめた。

「先生、そんな奴の言ひ方と聞く必要ありません、廊下にでも座らせとけばいいんですよ」

と静香から威嚇。

かわいそうに、されどどちらを選んでも死しか訪れないな。

将は心の中で合掌しながら、怯える先生を見守った。

「え、えーと」

先生が出席簿を何度もみながら一人の顔を見ていた。

そしてふいに将と目が合ひ。

すると奴の目がきらり、と光った気がした。

とてつもなく嫌な予感がする。

「よしー、じゃあ将に決めてもらひやつ」

やつぱり責任転化しやがつたあの野郎！ しかもどや顔で！

そして二人の視線が今度は「こちらを向く、視線だけで死にたい気分になつてくる。

「…先生」

「…なんだ？」

「机…もつて来て良いですか？」

「…許可」

結局もつ一つ席をもつてきて隣に座らせる」とで納得してもらつた。

そして現在はホームルームが終わり、転校生の席に人が群がつているところだ。

「すげー人気だな、凛の奴」

「そうですね…」

明らかに嫌そうな顔をしながら集団を見据える静香。

「もう少し仲良くなきないのか?」

「仲良く…ですか。すこません、いくらお兄様の頼みでもそれはち
よつヒ…」

「そんなに嫌いなのか?」

「嫌いとこつか…お兄様に手を出せなければいいのですが…その…
なんていうんでしよう、本能がこ
う…ポキッヒ」

「ポキッてなに…?」

そういうながらジエスチャーで何かを折る動作を繰り返す静香。

あらためて義妹の危険度を知った瞬間であった…

そして放課後、なんだかんだいって今日は凛の取り巻きが常にいた
おかげで、今朝のようなバトルは
起こりやすにならんだ。

「帰りましょ、お兄様」

凛が自分の鞄を両手持ちながら立ち上がった。

「やつだな」

今日は色々と疲れたから早く寝たい…

「将君」

「ん？」

そこで強姦の元凶である凛が、取り巻きをどかして出でた。

「私も一緒に帰つていい？」

「ああ、「だめに決まつてるでしょ…」」

全て言い終わる前に割り込まれてしまつた。犯人はもちろん静香だ。

「寄生虫に聞いてないわ」

「なんですか？」

ああ、一人とも、喧嘩すんなら席はなれてもいいつぢ

「はあ、一人とも、喧嘩すんなら席はなれてもいいつぢ

「でも…」

「ですが…」

それでも納得いかない顔で、睨みあつてゐる

「はあ～、じゃあ一人で…」

「私たち仲良しになつた」

「はい」

帰る、といおうとしたところで一人が肩を組み始めた。

すんごい嫌そうな顔してんな……まあ喧嘩するよかマシだな。

そんなこんなで、結局三人で帰ることになった。

わけなんだけど……

「くつくな

「嫌

「やで」

昇降口を出たところから、一人が両腕に引っ付いて来て離れてくれない。

そしてあつまる視線、嫉妬、殺氣。

「生きた心地がしねえ……」

「排除しますか？ お兄様」

またまたジエスチャーで何かを折るような動作を繰り返す静香をみて、将は溜め息をつく。

「やめてくれ……」

帰り道、こんな調子で商店街を歩いていたら、

「よつ兄ちゃん、可愛い子一人も連れてなにやつてんだ？」

見ながらにやばそつうなヤンキー一人に絡まれてしまった。なんて
いうか、漫画面でモブキャラっぽい。

「おお、可愛い！ どうだ讓ちゃん、こんな男ほつといて俺らと遊
ぼうぜ！」

一応男はだし、ここは俺が止めに入つておへか。

仕方ないと思いつつ、静香たちを後ろに隠すようにして、一人の
前に立ちふさがる。

「お前ら、その辺で“バキッ”つ痛

「男は黙つてな」

そうこいつで片方の不良に殴り倒されてしまった。

口の中が切れたのか、血の味が口に広がつていぐ。最悪だ。

そんな将を見ながら大笑いする一人組の声が響き渡る。

「だつせー！」

ガツ！

「へつ？」

なんとかうつすらと目をあけると、そこにには間抜けな声を出した一人の顔を驚づかみにした静香達が…

ガンツー！！

「ギヤアー！！」

物凄い勢いで地面に叩きつけていた。

叩きつけた後頭部をもう一度持ち上げると、地面と頭の間に血の糸ができる。

「死ね」

「やめろー。」

もう一度叩きつけようとした一人を両脇に抱えながらその場から逃げ出した。

「なんで止めたの？ 将君

「そうですよお兄様、あれは正当防殺だよ？」

「はじめて聞いたよ。そんなの…」

人殺しをしそうだつたというのに、全然反省していない一人を見て、将来が少し心配になるが、今回は自分が情けないため、叱ることはできない。

「せういえば凛、お前家どこなんだ？」

思い出したよつて凛にきく、転校してきたところとせどりかに家があるんだろう。

「ああ、それははついてからのお楽しみ

「別に楽しみにしてないです」

「はは……はあ」

「こつらが仲良くなつてゐる一人を見ながら溜息を零す将であつた。

相変わらず睨み合つてゐる二人を見ながら溜息を零す将であつた。

震・ヤンされ… 夕食… (記書き)

遅くなりました。学園祭の準備忙しいです：

麗・ヤンされ 夕食

「うるさいか」

辿り着いた凛の家は、将の家の前に建つてこなマイシヨン

「……つてうちの前かよー。」

「うん」

眩しい笑みを放ちながら返事をする凛とは反対に、 静香は心底嫌
そうな顔をしながら、

「最悪……」

と呟いていた。

「それはほんのりの台詞です」

「ふん」

「ふん」

「ん？」

なんとか一人が仲良くする方法がないか考えていると、 凛が制服
の端をちょいちょいと引っ張つてきた

「あの、将くんにお願いがあるんだけど」

「なんだ？」

凛は少し脅えながら呟くつと呟いた。

「今日夕飯食べにいつていー？」

「ダメにきまつてるじゃなー」

俺じゃあないぞ

「あなたには聞いてないわ」

「まあまあ、別に飯くらいいじゃないか」

なんとかまた戦闘になる」とだけは避けるため、落ち着かせる。

「む……お兄様がそうこうなう」

そういしながら渋々引き下がる静香。

「じゃあどうあえず家入ろうつか」

そう言つて3人で家のチャイムを鳴らした。

現在家のリビングです。簡単に説明すると、今リビングではなくても悪い空気が充満していました。

おかしごと、俺の計画では、

『ただいま、千鶴さん』

『お帰りなさい将くん、あら? そちらはお友達?』

奥からエプロン姿の千鶴さんが出迎えてくれた。

『うん、幼馴染なんだ』

『あらそつなの? 良かつたら夕飯食べていって~』

のはずだったの?...

『ただいま、千鶴さん』

『お帰りなさい将くん、あら? そちらはお友達?』

奥からエプロン姿の千鶴さんが出迎えてくれた。

『つていや違うよー 幼馴染ですよーー』

『やうなの? まあ何でもいいけど早く帰つてくださいね』

そんな身もふたもないことを言つ千鶴さんを何とか説得し、一緒に夕飯を食べることになつたのだが、

「……」

無言の食事が続いております、正直味がわかりません。

「お？」

そんなとき、こんな状況でも一心不乱にオムライスを食べている弟の顔に、ケチャップがついているのを発見する。

「実、ケチャップついてるぞ」

そう言つて頬についていたケチャップを掬い、自分の口に運ぶ。

「ありがとー！　お兄ちゃん！」

「ああ」

むむ、やはりケチャップは少しショッぱいような、――――

パキンッ

金属音？

突然の金属音に、その音の方向を見ると、こいつ笑った表情の3人が、スプーンを握り折りながらこちらを見ていた。

「え～と……ああ！　新しいスプーンとつて来るなー！」

はい、すいません逃げました。

結局その空氣に耐え切れなくなつた将は、その場を立ち上がりそそくさと離れていた。

「つていうかスプーン折るつて…俺の周りには普通の奴はないのかよ。…しかもさつげなく千鶴さんまで」

とりあえず人数分のスプーンを持ち、リビングに戻ると、せつまでと違つことに気づいた。

なんでみんな頬にケチャップついてんだ？

せつあまで何もついていなかつた顔に、赤い点がついている。

「ほい、静香、スプーン」

「あつがとうござりますお兄様」

「それと、ケチャップついてるだつ？」

一応氣づいてこるとほれづが、報告しておへ将、しかし静香は、

「どいですか？」

「いやせじ」と

「どいですか？」

何回こつても、"どいですか？"のみ。あくまでわからないを通す
らしさ。

もしかして取れ、といつてはいるのだろうか？

「ほい」

ようやくそのことに気がついた将は指で掬うと、ティッシュで指を拭く。

「…ありがとうございます」

あれ？

これであつてはいると思った将は、全員分のスプーンとケチャップ掬いをおこなつたが、三人とも不満があるのか、少し霸氣を出しながらもくもくと平らげていく。

なにか失敗したか？

「あ、実また」

自分の失敗を考えていると、また実がケチャップをつけてはいる。そのケチャップを取りなめる。

バキンッ！

「「「ご馳走様」」」

すごい音をたてて立ち上がる3人、その3人の手元を見て冷や汗が流れるのがわかつた。

スプーンが皿を貫通して机に突き刺さつてはいる。

怒らせないよ！」と。 そつ決意をあらためた瞬間でした。

震・ヤンヤれ… 夕食…（後書き）

感想くれたらうれしいです…

震・ヤンされ…風呂…（前書き）

すいません、新人賞に出すための原稿を書いているため、どうしてもそちらに手が出てします。

「……は？」

「だから、今日ここに泊めてつていつたの！」

はい、というわけで大変なことになつてしましました。現在の状況を説明すると、飯を食い終わり、割れた食器をゴミ箱に捨て終え、リビングへと戻ってきたわけなのですが、なぜか凛が突然今日一日泊まりたいと言い出した始末です。

「一応聞くけど、なんで？」

え？ という顔をした凛は、うんと言ひながら可愛らしく顎に指をあてながら考へ、何かを思いついたよつて、パツと指を立てた。

「引越ししてきたばかりで荷物がいっぱいだから？」

「なぜ疑問系、まあでもそういう理由なら一泊くらい…」

そういうながら視線を横へと移動すると、握り拳を手で覆いながら、黒い笑顔を見せてきている2人の女性がいた、

「…よくな…」

もう一度視線を正面に戻すと、今度は田元に涙らしきものを大量に詰め込んでいる凛さんのお顔が見える。さてこの場合、俺はどちらを取るべきなのだろうか、どちらをとっても危ない気がしてならないが…かと言つて、埃まみれの部屋で寝かせるなんて可哀想だし

な。

「まあ、今日ぐらこはっこかな」

「本当ー? やつた――――――.」

将の一言で、体全体を使って喜びを表す凜、それに対し、頭に角でも生えそつた程危険な一人が、こちらに向かって反論の声を上げた。

「お兄様? その考えは間違つてゐると思ひます」

「将さん? それはよくなつと思ひますよ?」

「まあやつはつとせ思つたがぢや、今日一田ぐらこはくないか?」

?

しかしここまで来たら引き戻るわけにも行かない。なんとか一人を説得できそうな理由を探しだす。

「そうだな……じゃあ明後日の日曜、一人の買い物に荷物持ちで着いていくとかは? 前服買いに行くとかいつてただろ?」

「……まあ幼馴染が困つてゐなう一田ぐらい仕方ないかしらね……」

「やつですね。お母様」

じつやう買ひ物付添いで手を打つことができたらしく。まつと胸を撫で下ろすと、時間を確認する。

もう9時か……明日も学校だし、そろそろ寝る時間が

時間を確認した将は、明日の授業を思い出しながら、今だに喜んでいる凜を指さす。

「おい凜、先風呂入れよ

「何言つてるんですか！？ お兄様！」

「お前が何言つてんだよ……

「ゴキブリ、略してGが風呂なんかに入つたら風呂が汚れてしまいまーす！」

「寄生虫、略してKが何を言つんですか……」

「何よそれ、あなた、Gの分際で私のほうが汚いと言いたいの？」

「あれ？ 気づいてなかつたの？ Kには視力すらないのかしら」

静香の乱入によつてまたバトルが発生しそうだ。というかGとかKとか、とても女子がする会話とは思えない。学校の連中にも見せてやりたいくらいだ。

一人の言い争いを見かねた将は、溜息を一度つき、一人の横を通り、冷蔵庫からイチゴオ・レを取り出して、直接飲みだす。

「うめえ

「お兄様」

「将君」

さりげなく最近ハマっているイチゴオ・レを飲んでいると、後ろから声をかけられた。

ようやく終わったか？ 飲みながら振り返り、

「ふつ……」

口に含んでいた液体を横に噴射してしまった。仕方ないだろ？ なぜか一人が下着姿という露出狂になつていたんだから。一人はお互い睨み合いながらこちらを向くと、

「「どうのほつが綺麗？」」

「は？」

そう聞かれ、素直に一人を見比べる。

静香はその雪のような肌に溶け込むような白いフリルのよつな下着を着ており、もはや肌と一体化しているのかと思うほど美しく、可愛らしさも秘めている。さらに腰まで伸びた漆黒の黒髪が全体を引き立たせ、どことなく大人っぽさもかもしだしている。

対する凛は、特に変わつていない、薄いピンク色の下着を身につけていた。こちらの肌も負けずをとらず白く美しい、しかも凛はクオーターで、白く長い髪をピンクの小さいリボンでちょこんと結んでおり、そのせいもあるためか、静香よりも体が白く見える。静香と違ひ色が全体的に薄いので、可愛らしさが強く出でていた。

「そんなのいいから、さつわと一人で風呂入れ…………！」

「つて！ 僕は何をまじで考えてんだ！？ 正気に戻れ俺！」

「わやつ、ひよつ、お兄様！」

「将君ー。」

有無を言わさず一人をリビングから追い出され、扉を閉め、その場へぺたんと座りこむ。

「疲れた…」

お兄様にリビングから追い出され、仕方なく私はこのGと共に浴槽へとやつてきた。

幸いにも将の家の風呂はそれなりにでかいため、一人くらいなら無理をしなくとも入れるくらいの余裕はある。

「それにしてもなんで私がこんなGど…」

「それはじつちの台詞です」

「でもお兄様のお願いなら仕方ありません」

「… そうですね」

わやつとお互にわつぽを向きながら下着を脱ぎ、静香から先に風呂場へ入った。

わばあーと頭からお湯をかぶり、長い髪を後ろで巻き留め、風呂へと入る。

「ふう」

それからすぐに凛も風呂場へと入ってきた。一瞬ひらめいたと見るとすぐにそっぽを向き、髪を洗いだした。

「む」

そしてその姿を見ていたは凛は不覚にも、凛の純白の白い髪を綺麗だと感じてしまった。

私としたことが、あんな髪を綺麗だと思つなんて…

自分自身を叱咤しながらも、もう一度見てみる。

私のほうが綺麗なのは当たり前ですが…お兄様は白い髪のほうがお好きなのでしょうか…

考えながらジーっと直視していると、ふいに視線が重なり、すぐにそっぽを向く。髪を洗い終えた凛が、静香から少し離れた位置から湯に浸かった。

しばらくの沈黙の後、十分に温まつたのか、凛が立ち上がり、静香に声をかけた。

「あなたは…将君の…」と…

「愛してこます。この世の誰よりも」

はつあつとそつ言こ切ると、凛の眼光が静香の姿を捉え、そして

口を開いた。

「なら……私はあなたを殺すかもしないわ」

それだけ言つと、凛は風呂場を後にした。残された静香は、扉を見つめながら、自分が微笑んでいるのがわかつた。

殺す？ 私を？

「面白」……

震・ヤンでれ 風呂 (後書き)

さてさて、更新が遅れてしましました…、しかし気づいたことがあります。この作品書きやすい…

正直4時間もあれば一話はあつといつ間でしたすいません…

しかし、友達にも言われたのですが、感想もらつたら少なくとも1週間以内に更新しないと言われてしまいました。

これからモンハン3rdも出るつて言つたのになんて無茶を…

でも友達の言つことがもつともなので、感想、アドバイスをもらつたら1週間以内に対応しようつと思います！ 来なくとも、まあそれなりに更新していきます。一応終わりは考えてあるので、最後までよろしくお願ひいたします。

では次話、震ヤンでれ…深夜…で会いましょう

麗・ヤンされ 深夜

「んじや、おやすみ」

「お休みなやー」「…」

現在将は就寝につくといひだつた。風呂から出た凛が、一緒に寝たいと言い出したときせざどうじょうかと思つたが、なんとか2時間かけ説得し、静香の部屋で寝るように説得した。部屋の前で一人と別れ、自室に入り、すぐに電気を消し、とりあえずベッドにダイブ。

「今日は色々あつすぎて疲れた……あいつら…少しでも仲良くなれば…」

やじまでも考えたといひで、将は睡魔に負けてしまつた。

深夜2時、愛しのお兄様に、

(凛と一緒に寝てやつてくれよ)

といわれてしまつたので、百万歩ゆず……うすに、お兄様からもらつた枕で手を打つた。そんなこんなで現在静香の部屋では、一人の美少女が睨み合つていた。

「で? どちらの方がお兄様を愛してゐ、といつ話を始めてから3時間が経過しています」

「やうですね」

静香たちは11時にこの部屋に来てからずっと、どうやらの方が将は愛してるか、ということについて講義しあっていた。だが正直、お互い同じようなことを繰り貸し言っているだけで、終わりがまたく見えてこない。本当なら開始10分で戦闘が始まリそうだったが、隣の部屋で将が寝ているため、言い合いしかできない状況であった。

何か良い方法はないかしら？ と少し凛が思考を働かせると、ある妙案が彼女の頭に閃いた。

「ゲームで決着をつけるっていいのさ？」

「ゲーム？」

「やつ、お兄様が最近ハマってる格闘ゲームで」

彼女が思いついた妙案とは、最近将は買つたという格闘ゲームの対戦だ。しかし、その妙案に凛は乗つてこなかつた。

「そんなことで決めるようなことはないでしょ？」

やれやれと首を左右に振りながらあきれた素振りを見せる。ここまでは静香の予想通り、後は - -

「 - - 勝つた方が、お兄様とキスできるーー」

とても小さく、聞こえるか聞こえないかの音量で言つて、凛の体がぴくっと反応をしめし、

「……そのゲームはビーム

先程とは打って変わった態度の凛に、思わず口元がにやけるのがわかった。

「お兄様の部屋よ……」

「ああ、始めましょう」

なぜか勝手に兄の部屋に入った拳旬、勝手に兄のゲームを付け、しかも兄の脣が賞品になつていて、夢にも思わず、将はただぐつすりと熟睡していた。

兄を起しきれないために、音量はつけずにゲームを開始する。

「それ、次貸しなさいよ」

そう言つたのは凛、静香が今読んでいるのは説明書、お互いゲームなどまったくやつたことのない初心者のため、とりあえず読んでおこうと考えた。

「ん……」

ぽいっと、読み終わった説明書を相手に投げつける。それを受け取つた凛もまた、パラパラと流し読みをし、説明書を机に投げつけた。

「いい？ 一本勝負よ。勝つた方がお兄様の脣をいたぐ、いいですかね？」

「わかりました。あとで取り消しなんてなしですよ?」

「それは」ちりの台詞

お互いに軽く挑発的口調で会話しつつ、キャラを決める。

こんなGなんかに、絶対負けてなんかやりませんわ…

今ここに、伝説の対戦が生まれる…

一人が選んだのは、そのゲームの、言わば主人公的キャラと、そのライバルキャラ、お互いのステータスはほぼ同じで、どちらも万能キャラであった。

始まつた直後から、お互いの会話が一切おきなくなつた。ただただ将の唇を手に入れるため、このゲームに全てを捧げていた。

開始から10分、画面内のキャラは激しく動いているが、お互いのキャラは1ダメージも受けてはいない。それもそのはず、受けるはずがないのだ。このゲームには、受け流し、簡単に言えばギリギリでガードすると、ダメージは発生しないというものがいる。これは上級者なら無意識に敵の攻撃に反応し、全国レベルなら8・9割はこのガードで防いでいる。

確かにこの二人は、今まで一度もゲームなどをやつたことはない。そのため、コンボなどはまったくと言つていいほどできない。しかし、受け流しは別だ、これならば複雑な操作はいらない。彼女達は、相手キャラの手が突き出される瞬間、全て狙つて受け流していた。高速で切りつける必殺技だろうが、見切り不能な一瞬の斬撃だろうが、全て目で見て防いでいた。

絶対に負けない…

彼女達の長い夜は、まだ終わらない。

「ん……」

朝か…、静香が起こしていないとこいつとは、珍しくかなりの早起きしたのだろうか？

そんなことを考えつつ、眠い目をこすりながら体を起こした。

「ふあ～～つて、お前ら何人の部屋で勝手にゲームしてんだ？」

朝っぱらから、一人の美少女がカチカチゲームをやつているとう、世にも珍しいもの見た将は、一人の元へと近づいていった。

「お～い、聞こえてる？ つていつか何やつてんだ？ お前ら

まったく返答がない。一人はただじつと画面を見つめたまま、コントローラーを動かしていた。その後も声をかけるが、まったく石化の魔法でもくらったのか、まったく反応してくれない。

いつもなら、静かでいいか、と思う将だったが、朝っぱらから無視を受けるのは、少しつらい。画面を見ると、お互の体力はお互にMAX、これなら消して平気か。そう考えた将は、ゲームの電源を引っこ抜いた。

「あれ？」

「 やつやく動いたか、 どんだけハマったんだよ…… 」

「 よつやく動いたか、 どんだけハマったんだよ…… 」

「 お兄様ー、 おはよーいります 」

「 将棋、 おはよーい 」

「 むさよつ 」

まさかここまで「 一人がゲームにハマるとはなー、 でもま、 これで
一人も仲良くなつてわけか。 」

「 結局、 決着はつかなかつたわね。 」このく

「 まあ、 あそのままやつてたら私の勝ちに決まつてましたが 」

前言撤回、 相変わらず仲悪い。

獣のよつてんじあつ「 一人を、 びつびつと落ち着かせる。 」

「 あそのままやつてれば、 お兄様の唇は私ものでしたのにー。 」

「 何を言つてゐるの? 寝言も大概にしなでー。 」

「 お前ら、 寝言は寝て言え 」

もはや止める気も失せた。 まさか勝手に自分の唇がかけられてい
るとは予想もしなかつたことだ。 まったくこつらは、 と一人を睨
んでいると、 そこで将に名案が浮かんだ。

「なあ、その戦い、俺も入つていいか?」

「え?」

「お兄様も?」

突然の将の言葉に、二人が思わず顔を見合わせる。そんな二人を見てフツと将が笑みを零す。

「もし俺が勝つたら、お前らは仲良くすること、俺が負けたら、俺を一日好きにしていいぜ」

「乗つた!..」

将の提案に全力で乗つかると、一人は顔を洗つため、一度下へと降りていった。

「あいつら、昨日始めたばかりで俺に勝てるとも思ってんのか?」

一人、勝ちを確信していた将は、肩ならじに少し練習しようか、ゲームの電源を付け直す。

「ん? 対戦履歴?」

「ああ、さつきのか

この格闘ゲームは、常にネットで全国に流れしており、操作しないかぎり対戦はネット公開されている。

「え？」

二人の対戦動画をちらりと見ようと思つたつもりだつたが、その対戦動画の再生回数と、対戦時間を見て思わず顎が外れそうになる。

「対戦時間：7時間35分？」

恐る恐る再生を押し、数分だけ見ると、将はすぐにゲームを止めた……

「私が勝つに決まつてゐわ」

「もう一度顔洗いなおしてきたり？」

顔を洗い終わった後、尚も喧嘩しつづけながら、一人は将の部屋へ戻ってきた。

「お兄様、お待たせ……」

「？ どうかしたの？」

先に中を覗き込んだ静香の顔が無表情に変わることを見て、凛もまた中を覗くと、そこには将の姿が消えていた。

「まつたく……」

「将番つたら……」

「「お仕置きだよ……」」

二人が嫌な意味でハモつた瞬間でした。

震・ヤンされ 深夜（後書き）

お待たせしました。今回は暴走させようと思いましたが、大人しめになつてしましました。

え～その大きな理由が… 実は最近、一時の気の迷いにより、神・ヤンでれという100%R-18作品を書いてしまい。こちらが大人しくなりました。

ノクターンノベルスで投稿しようつと思いましたが、冷静に考えるとかなり恥ずかしいので、胸の内に封印しておきますww

これからもよろしくね～、感想、アドバイス、要望など待ってます！

さて、将が家を飛び出し（逃げだし）てから約1時間が経過しよ
うとしていた時、

ガタンシゴトンシ

現在将は、電車の中でゆつたりと座り、適当に彷徨っていた。

「危なかつた……」

やつ小ちづぶやきながら汗を拭きとる。

あの後、家を飛び出した後、将は少し商店街を彷徨い、姿を消す
のに最適な場所を探していた。そして思いついたのが、電車で自分
もじらない土地に行くことだ。

これならいくら静香たちでも見つけることはできない。

やつ思つた将が、ふつふつとなぜか馬鹿みたいに含み笑いを上
げる。

そんな将を周りの人々が疑視しているとも知らずに、笑う。

電車に乗つて30分ほど経過したといひで、将はよつやく電車か
ら降りた。そこは将がいたところに比べると田舎で、駅前だとい
うのに周りに建物があまり建つていっていない場所であった。

「よし、さすがにここなら静香たちもおつてはいけまー

見知らぬ土地を見て、満足そうに頷く。

それにしてもこれからどうするか、見つからないのはいいとしても、少なくとも夜まではこの見知らぬ土地で過る「がない」といけないわけだし、どこかで暇潰ししないといけないし、

考えながら改札を通り、もう一度辺りを見てみる。

「とは言つても、何もないな~」

う~ん、と頭を悩ませていると、大きな看板のよつな物のを見つけ、近づいていく。

「この辺一帯を表す地図か」

それは、この駅周辺を細かく記してある案内地図板だった。

さてと、何かいい暇潰しになるとひびつと、

何か暇潰しだかる場所はないか、地図を確認していく。

「あ、ここは……」

すると一ヶ所に視線が止まった。

「ここからそんな遠くないし、暇も潰せるな。

うん、と一回頷くと、地図を引めり、その場所へと足を向けた。

「「」を通ったのは間違いないみたいですね」

将を追つよに家を飛び出した一人は、現在別々に探していた。
まったくお兄様つたら、急に逃げ出すなんて、よっぽどあのGの
ことが気にいらなかつたんですね。

静香が訪れているのは商店街、先程将が通つていた道を歩いていた。

お兄様の匂いがさすがに薄くなつてきていますね。このままでは
探すのが面倒になつてしまします。急ぎますか。

そう言い聞かせ、再び鼻をぴくぴく動かす。静香は、愛しのお兄
様の匂いを一日1-2時間以上嗅いでいるため、いつしか犬のよう
匂いを辿つていくという芸当ができるようになつていた。しかしそ
れでも、商店街では煙草や色々な人の匂いのせいで、将の搜索を困
難に陥れていた。

そしてようやく将の匂いがどこへ向かつたのかを特定させる。

「この方角は……やはり駅ですか、まあお兄様の性格、思考を考え
れば、9割の確率でこの市には残つていないと思つていましたが、

将の考えを知り尽くしている静香は、もうこの市に将はいない
とわかつていたが、凜のこともあるため、万が一ということを考え、
確實にことを進めていたのだ。

行き先がわかつた静香は、さっそく駅へと続く道に足を向ける。

「あ！ 何この子、めっちゃ可愛いじゃんー。」

お兄様が駅に向かつたといふことは、電車で移動したといふこと、急がないと面倒なことになりそつですね。

「ねえつてばー！」

何だ？ この馬鹿。

突然進行方向を遮つてきた男の存在によつやく気付いた。多くの女性を周りにはびこらせているその男に、静香は「男A」と名付けた。

「男Aは、茶髪で、耳にピアスなどをあけ、明らかチャライ格好をしていた。この商店街をよく通るのか、周りのお店のおばさん達が、厄介そうな視線を向けていた。

「なんですか？ どいてください。ってかどけ」

兄がいない時も、なるべく良い子に振る舞つてゐる静香だが、今は将のこともあつて機嫌が悪い。しかし、そんなことまったく関係なしに、男Aはしつこくナンパを続行していく。

「まあそういう言わずこども、これから飯食べに行かない？ もちろん俺の奢りで」

そんなことを気持ち悪い顔でぼやく男Aに呆れ、無言で横を通り抜ける。しかし男Aは諦めずに、後ろから追つてきた。

「それなら、好きなもの言つてよー 何でもプレゼントするか

「う

「……」

「あ、俺は大石 秀雄、あの大石グループの息子なんだぜ？ す
ごこつしょ？」

勝手に自己紹介をし始めた「ミ男Aは、自分が金持ちである」と
を主張しながら付いてきていた。まあ眼中にないですが、

「だから行こうぜ？ な

そう言つて、「ミ男Aは腕を掴んだ。
掴まれた。

お兄様以外の男に、腕を……

掴まれた。

「消えろ」

その後の静香の対応があまりにも速かつたため、スローで流しま
す。

ヒュッ（振り向きざまに足払いする音）0・5秒

ドコッ！（浮いた体をけり抜く音）0・2秒

バコン！（十メートル近く飛んだ後、「ゴミ捨て場に頭から突っ込む音）1秒

以上により、目標は完全に沈黙。周りの取り巻き、店の人も声を失つてしまつた。

「『』の分際でお兄様のものである私に触れるなんて……」

殺す。と言いたいところだけど、これ以上こんなところで油を売つていいわけにもいかないし、先を急ぎましょ。う。

そして静香は、無言になつた商店街を再び歩き始めたのだった。

「まったく将君つてば、逃げることないのに」

現在凜は、静香と違つ道のりで商店街へとやつてきていた。今は帽子を購入し、少しでも顔を隠して行動していた。

は〜、面倒くさい、けどこれくらいはしておかないと、すぐ声をかけられちゃうし。

そう、彼女はもと大人気アイドル“TENSHI”だ。なので変装なしで外を出歩くと、たいてい声をかけられてしまうのだ。まあ変装といつても、本当に帽子を被るだけだが、案外それだけで気付かれないものである。

それにしても将君つたら、私がお金を貯めている間にあんなKに入られるなんて……まあかつこいいからしたないかもしね

いけど、

凛の頭の中で将の妄想が広がっていく。

……えへへつ

「お母さん。あの人美人さんだけど顔がすごいよ？」

「じつ！ 静かにしてなさい！」

周りからの奇怪な視線に、凛の緩みまくった表情が元に戻る。

はつ！ 私としたことが、ついつい妄想に夢中になっちゃった。
さてと、とりあえず気配からじつに来ていたことは間違いないみたいだけど、

口から垂れていたよだれを拭きながら、田の前の建物、駅へと入つて行つた。

改札のところまで来て、カードをかざさうとポケットを探る。

「あ、カードを忘れた……」

けどお金あるからいつか、確かキップ？ とかいうのを買わないといけなかつた気がする。

今までは、マネージャーからもらつたICOカードをかざすだけで通つていたため、切符の存在を名前だけしつついた。

そう考えながら隣を見ると、知らない人が小さい紙を通しているのを見て、確信する。

あの小さいのが切符、ところはあの機械で買つんだ。

そこまで理解し、なんとか切符の購入機の前に立つ。画面に表示されている切符を迷わず押し、面倒なので一万円いれで一番高いものを購入した。

私はまた、大きなことを成し遂げたよ！ 将吾！

一人で切符を購入したことに感動を浸ると、急いで電車に乗るため、もう一度改札へ向かうが、

「ねえ、君つてもしかしてアイドルのTEENAGE?.

変なのに絡まれてしまつた。

「違います人違いです。では急いでいるので

そう言つて穩便に済ませようとするが、通せんぼつするかのようにな男が前に立ちはだかる。

それを思わず殴り…そうになるのを寸前で、

「だよね！ あ、じゃあこのあとテート、げふつ！」

止めずに腹に一撃を食らわせてやつた。私をテートに誘つていいのは未来永劫将君だけだっていうのに何言つてんだコイツは？

腹に一撃をくらい氣絶している男を、知らぬ顔で放置しながら切符を通して改札を抜ける。

待つってね将君！ 今迎えに行つてあげるから！

そして凛は階段を駆け上がる。

……切符を置き去りにしたまま……

震・ヤンされ…恥…

「…」

先程写メで撮った地図と、自分のいる位置を照らし合わせる。

ふむ、田舎にしては中々綺麗なゲーセンだな。

将が暇潰しに訪れたのはゲームセンターだった。最近改装でもしたのか、周りの古臭い建物と違い、このゲーセンだけ新しくできたよつに綺麗になっているのがよくわかる。

今朝の格ゲーの対戦を見て、少し特訓しようとおもっていたのだ。

よし…ここで少しでも腕を磨くため、練習して行こう。
ぐつと手に力を込め、意気揚々と自動ドアを潜つて中に入る。まだ開店してから時間がたっていないこともあり、入っ子一人いない。やはり昔からあつたのだろう、中はそれほど綺麗ではなく、煙草の匂いが充満していた。

そんなことをまったくせず、さくそく空いている対戦格闘ゲーム「レッドファイト」の席へと座り、百円を投入する。

それでも、あの凛が転校してくるとは夢にも思わなかつた。小学校の一年の時に知り合ひ、中学の時、突然引っ越した彼女は、その後まったく音信不通で高校まで上がつていつた。

昔は仲が良かつたのは覚えてるが、転校してきてまで俺に会いに来る理由なんて普通あるのだろうか？

それにあいつら、初めて会つたはずなのになんであんなに仲が悪いんだ？

二人の仲がなぜ悪いのか、考えならレバーを動かしていると、画面にNEW CHALLENGERという文字が表れる。

げつ、なんか乱入入ってきた。まあでも、俺は都会で鍛えてつからな、こんな田舎野郎なんか一捻りにしてやるぜ！

ふん！ と腕をまくり、レバーをがつちり握り、ボタンに手を添える。

相手が選んできたのは、自分と同じキャラ、力比べのつもりなのだろうか。将は対抗心をMAXにして、対戦が始まるのを待つ。

ファイトッ！

そして……試合開始のゴングが鳴り響いた。

……

……

……

結果だけ伝えよつ、負けました。

いやあもうなんていうか、見事にカウンターのオンパレードでした。こちらの動き……つていうか思考を完全に捉えた見事なカウンター

だった……

周りに人がいなくてよかつた、なんて惨めなことを考えつつ、さりげなく相手側の通路へと回っていく、せめて顔だけでも覚えて帰ろうと思つたからだ。

そう、せりげなく、ちらりと見るだけだ。ちらりと一瞬顔を

チラツ

そこにいたのは、じちぢを見ながら、一二口笑つている

「よ

明がいた。

「つて！ よ、じゃねーよ！ なんでこんな辺境の地にあるケーセンにお前がいんだよ！」

「辺境つてお前……別にそんな離れてねえし、今日ここに来たのは、『イツの大会が』ここに開かれるからだよ」

「大会？ レッドファイトの？」

「そそ」

返事を返しつつ、明が華麗にコンボを決めていく。

「お前つてこんなにこのゲーム強かつたのか……」

「あれ？ 言つてなかつたつけ？ 僕前回全国大会三位までいったんだぜ？」

「まじで！？ お前が！？」

「ああ、ところで今日はお前一人なのか？ あのブラコン妹はどうした？」

素で大驚きする」ちらの反応が楽しいのか、明が含み笑いをしながら質問をしてきた。その質問のおかげもあってか、先程まで忘れていた今朝の記憶がよみがつてくる。

きつと今頃探してんだろ？ なぜだろ？、見知らぬ土地にいるはずなのに、もう既に近くまで来ているような気配を感じる。もし万が一見つかつたりしたら

「死……」

「詩？」

疑問符を浮かべる明に、何でもないと云いつつ、自分自身を落着かせる。とにかく、今日は一日おとなしくしておこう、大丈夫見つからなければOKだ。

「お前本当に大丈夫か？ 顔真つ青だぞ？」

「へ？ ああ、平氣平氣、それより大会は何時からなんだ？」

「11時から」

時間を聞き、壁に掛けられている古い丸時計を見ると、時刻は10時ちよい過ぎ、あと1時間近く時間が余っている。

正直、こままだ一人で逃げ回っているより、友人と一緒に居たほうが楽しいな。

「なあ、開始までもまだ時間あるみたいだし、少しICOのキャラクターとかみないか？」

「おひ、いいぜ、行くか」

そう言つて明はゲームを放置して立ち上がりだした。話を聞くと、どうやら彼の持ちキャラじゃなく、やつている意味がないのだとう。

だったら乱入なんとしてくんなんよ！ と思もわず殴りそうになるのをこらえ、二人でICOのキャラクチャーの台が置いてある場所へ移動するのだった。

一方その頃、凛は電車の中で、携帯を眺めていた。ピンク色の小さい携帯の画面には、地図が映し出されており、その上に小さい点が一つ、ぴかぴか光っている。

まったく将君つてば、またゲームセンターなんて体に悪い所に行つて、

はあ、とため息をつきながら携帯を閉じる。

もうわかったかもしれないが、今携帯で見ているのは、将に付け

られている小型の発信機だ。凛は静香とは違い、超人的な力ではなく、機械の力を利用して、追っているのだ。

これなら無駄に動きまわらずに、楽に居場所を知ることができるのである。

それにしても……視線を感じる。

チラツと周りを見てみると、みんながこちらを見てくる。

やつぱり気のせいなんかじゃないよね……

一応帽子は被っているが、やはりそれだけでは足りなかつたのだから。ほとんどの人が、ひそひそと話し始めた。

「ねえ……やつぱりあの人」

「HIMEなのか……？」

「似てる……みなあ」

通学中の学生、サラリーマンたちがこちらの顔を覗こうとしてくるのがわかる。下を向いて帽子を深く被っているが、それでも時間稼ぎにしかならないだろう。

将君のいる駅までまだ10分くらい掛かるし、このままだとられるのも時間の問題、どうしよう……

正直このままやり過ごし、ばれても知らん顔というのが手ひとつ早いが、昔それをしてた時にひどい目にあつているのだ。

あれはアイドルになつて2年目の仕事帰り、タクシーがつかまらなかつたので、一人電車で帰つている時、たまたま帰宅モラッシュの時間帯に乗つてしまつた凛は、ぎゅうぎゅう詰めになりながら、目

的確に着くまでじつとしていた。

しかし、残り一駅の時に、人とぶつかった衝撃で、着けていた帽子とサングラスが外れ、周りの人々にばれてしまうという事件があったのだ。

その時は、ほぼ全員が握手やサインやらをねだり、一斉に押し寄せてきたのだ。

もちろんそれだけなら別に仕方ないと思つ、だがこれは始まりに過ぎない。

次の駅で下車した凛は、押し寄せてくるファンを片づけるため、面倒くさいが一人一人対応し、高速でサインを書き、握手をしていつたのだ。

そして表れたのだ……女性の敵が……

まあ簡単に言つと痴漢だ、凛が笑顔でサインを書いている隙をついて、凛のお尻に手を伸ばしそして 血まみれになつた。

触れられた瞬間、回し蹴りで顔面強打、そのまま仰向けになつた男の腹に踵落とし、男は重傷で即座に病院行き、駆けつけた警察に正当防衛を訴えつたが信じてもらえず、結局この事件は裏で処理され、表にはさらされなかつたが、その後の活動に支障をもたしてしまつたのだ。

そして肝心の凛は、“殺さなかつただけましたと思つたけど……世の中上手くいかなものね。”といった感じに、まったく反省の色を見せていなかつた。

まあこんなことがあったわけで、なるべくばれる」とはしたくない、しかも今はもう事務所をやめてしまったため、裏でもみ消すこともできなこから尚更。

わい、じつしまじゅう。

わいじつ都えてるひちい、周りの視線は集まる一方、次の駅で一田降りる? いや、それだとしかするとあのくに先を越される可能性がある。それだけは阻止しなこと、妻として、でも

「あの」

「のまま見つかってもひとと時間を食ひこになるかもしれないし、

「あの」

でもでも

「あのー。」

「ああむー。わいきからひむわこわねー。」

あ、ばれた。

田の前に居たのは、自分より少し年下っぽい男の子だった。つい条件反射で返事をしてしまって、正面から顔を見られてしまった。こちらを見る少年の田にきらきらと眩しい光が宿ったような気がした。

「やつぱつー あのアイドルのTENZUHOUですよーー?」

「え、ち、違います！」

「どうしよう、」そのままだとまた前みたいに……

予想通り、話を聞いていた人が次々と席から立ち上がり、「ちからじゅうへ、」のままだとまた前みたいに……に集まってきた。

「え、でも……」

「な、なにか良い言い逃はないか？ な、なにか……

咄嗟に言いわけを考えるが、この場を凌ぐ良い言いわけを思いつかない。人間誰しも、追い詰められているほど過ちを繰り返すものだ。

「「、「これは……」「スプレなんです！」

自分でもさすがにないと思ひ、辛い言い訳をしてしまった。周りのみんなもざわざわと慌てているのがわかる。

「ひなつたら……もつ殺るしか

そう考えがまとまりかけた時、少年が歎声をあげた。

「す、す」「……」

「え？」

少年の予想外の反応に、その場一同唖然とした表情になつた。

「一」んなに似てるなんてすげですよー。あ、もしかして今はやりの特殊メイクって奴ですか?」

けど、Iの流れに乗るしかない！

「そ、そ、う、な、ん、で、す、よ、」
「いや、大、変、で、し、た、よ、」
「こ、の、メ、イ、ク、」
「8、0、」

「へ～気合い入つてますね～」

少年と意味不明の会話を続けると、周りの人々が拍子抜けしたような表情をする。

「なんだよ、『スプレかよ』

「よくよく考へたら」「んなど」「こるわけないか」「米穀」「がー

迷惑だな

と言いつつ、みんな元の場所へと戻つて行く。そしてなんとか目的地の駅まで辿りつくことに成功した。

「じゃあ私はここだから、ありがとうね」「

そう言って降りると、後ろから少年の声が耳を打つた。

「うん！ がんばってね、コスプレイヤーのお姉さん！」

その言葉で、ホームの人々から嫌な視線が集まつた。

私はもしかして、大事なものを失ってしまったのかもしれない……

その後、早く出ようと改札に行つたが、切符を取らなければいけないことを知らず、結局時間を取られる凛であった。

電車に乗つて40分くらいたつたころだらうか、ようやくお兄様の匂いが残つてゐる駅を発見した私は、その後も匂いを辿り、ある一件の、見た目綺麗なゲームセンターに辿りつくことに成功した。

しかし、いざ中へ入るうかと思つた時、ある不愉快な事態が発生した。

あと少しでお兄様に会える、それなのに

「「なんであなたまでいるのよ」」

静香と凛の声がシンクロした。

そう、こぞ入ろうと思つたら、真横に凛が立つていたのだ。

私のほうがお兄様を愛しているのに、こんなGなんかと同等なんて、なにかの間違ひにきまつてゐる。

しかしそう考へてゐるのは凛も同じ、二人は沈黙を保つたまま、しばし肉食獸な眼で睨みあう。

「とりあえず中に入りませんか?」

「そうですね」

「のままでは埒が開かないと踏み、提案を出すと、凛も同じ」と思つていたのか、あつさりした返事が返つてきた。

睨みあつのをやめると、今度は相手の様子をうかがいながら、二人同時に自動ドアを潜つた。

しかし睨みあつていたのもそこまで、中に入った途端、二人共、店内をキョロキョロと見渡し出した。

どこですか？ お兄様

「あ

見つけた！

向こう側の角のUFOキャッチャーに立つてゐる、お兄様の姿を、静香はしっかりと捉えた。

何かを取ろうとしているのだろう。台の前で、ガラスの中にある商品を左右から真剣な表情で覗き込んでいる。

その姿に鼻血が出そうになりながらも、一人はゆっくりと駆け寄つて行き、声をかけようとして 気付いた。

誰かがいる？

お兄様の傍に、別の人間が存在することに気付いた一人は、よく目を凝らして見てみると、もう一人男が立つていた。

将の隣で力チカチと携帯をいじるその姿に、静香は見覚えがあつ

た。

あいつは確かに……同じクラスの明とかいう奴だったかしら？

なんとか記憶から取り出す。二人は友人という関係を、静香も承知はしている。毎晩携帯のメールチェックの時にも把握してるし、学校にいる時は8割がた絡んでくる男だ。

氣を使ってくれる部分も多々あるため、静香もそれなりに気に入っていた男だったが、今はそんなこと関係ない。

今はただ、一人で一緒にゲームセンターで仲良くしていることが重要なのだ。

静香は相手が男だろうが、子供だろうが、将に近づくものは敵とみなす、今までは、兄に近づくものを全て先に潰してきたが、あの事件以来、静香も少し丸くなってしまったようだ。

こんなことになるなら、もっと早く手を打つておくべきだった。そう後悔の念を感じながら、明を睨みつけるが、向こうはまだこちらに気づいていない。

あの男……

そしてこの瞬間、静香の中で、

……生きてるひとを後悔せしむる。

明が、氣をきく奴からお兄様に近づく害虫Bに変わった瞬間だつた。

ねむけ～？ 富代 静香（前書き）

なんか部屋掃除したら、これを書く前に書いた絵が見つかったので貼っておきます。名前の漢字が違いますが気にしないでください。

おまけ？ 宮代 静香

宮代 静香
ミヤシロ シズカ

17歳 高校2年生 将より誕生日が2か月遅いため、妹

好きなもの 将、将に関するもの

嫌いなもの 将に近づくもの（基本全般）

得意なこと、もの 投擲（特に包丁） 殺人術 将の追跡

苦手なこと、もの 母

将来の夢 将との幸せな新婚生活

呼び方 お兄様

頭脳明晰、スポーツ万能、容姿端麗の完璧少女

いつ殺してもおかしくないほど兄を好きでいたが、最初の工場事件の一件後、将が人を気づつけることを極端に嫌つていてことを知り、計画していた、母、弟暗殺計画を未遂に終わらせ、なるべく兄の前では人を殺さないよう努力している。

将を好きになつた理由は、過去のとある出来事が原因

それでは画像を貼ります

ペタリ

> .116339 — 2252 <

ねまけ～？ 富代 静香（後書き）

ちなみにこれを書いたのは自分です、へたくそですいません（＾＾）

これを書き始める前に書いた絵なので、感じがすこし違っていますが、勘弁してください。一応他のキャラも書いてあります、あまり自信ないので、また今度貼るかもしれません。では！ これからもよろしく！ 感想くれるとありがたいです。…やつぱりもう一回書き直そつかな……

震・ヤンでれ・ゲーセン

将は先程からUFOキヤツチャーに熱中していた。

少し前、明と共に見てまわつてゐると、「お菓子でも食べないか?」と、こう話になり、せつかくだからヒロキヤツチャード取ろうといふことになつた。

「やつはー、あと一回で取れやー。」

そういうて財布の小銭入れから百円玉を挿入する。このセリフも、既に何回いつたか覚えていないかつた。

鋭い目でお菓子を睨みつけ、UFOキヤツチャーを操作する。1
のボタンで横……2のボタンで縦……

STOP！ きたこれえ――！ 今度こそ頂いたぞ！ 巨大蟹

煎餅！

止まつたは、ほほ真ん中のJUJUTな部分！ アームが獲物を捕えるようにゅつくりと落ちて行き、商品をがつちりと掴む！ そしてゅつくりと持ちあがつていき

ほとつ

つとこつ頭を出して落とした……元あつた位置に、

乱暴に財布の小銭入れをあけ、中から百円を取り出そうとしたが、出てくるのは十円玉ばかり、しかたない、ここは明に借りておこう。

そう考え後ろに立つてあわう間に手だけ差し出す。

「明、悪いけ百円貸してくれ、後で返す」

それにしてもこれどうせいつて取ろうか、もう少し手前を持ちあげたほうがいいのか？

「おい明、百円」

あれやこれや考えながら、明に催促をかけるが、いつになつても「インが手に乗ることはなかつた。遂に痺れを切らし、文句を言おうと後ろを振り返える、そしたら、

「おー、お前なにやつてんだ……よ？」

明が一人の美少女に縄で縛られてました。

.....

どれくらいの時が経つだろう、時間にしてまだ一分経つたか経つてないくらいなのに、1時間近くずっと固まつているような、そんな違和感を覚えた。

目の前でおこなわれているのは、静香と凜が初めて一人の共同作案、明を縄で縛りあげるという奇怪なものだった。明は口にまで縄を回され、恐怖のあまり顔が凍りついている。

「お前らー、俺の親友に何するんだ！ とつと離れるー！ なんて

ことを言えるわけもなく、ただ黙つてこの状況を切り抜ける方法を考える。主に明を犠牲にする過程で、

しかし時は止まりはしないのが現実、1分が1時間というのも感覚に過ぎない。そうこう考へてゐたのも、明の縛りあげが終了間際のところまでできている。

いつなつたら、ナチュラルにこの場を立ち去るしかない。

「あ、やつべ、俺としたことが、お金をあらじてくるくるの忘れてた。いや～おっちょこちょいだな～俺

「座つて

「はい……」

とわりげなくその場を離れようとしたが、静香の一言で断念、冷たい冷たい床に正座させられてしまった。

静香と凛は、明の体を鼻以外全てを縄で多い尽くすといふ、なんとも気持ち悪いとした言いようのないもの作ると、それを地面へ転がした。生きてるんだろうか、

「で、お兄様」

「私たちから逃げて、こんな家畜となぜこんなところにいるんです？」

そう言つて転がした明？ に一人が足をがしつと乗せていった。その目には、もはやなんの感情が含まれているかわからない目の色をしていた。

「ああ、試してみてください、返答しだいによつては……」ひかりにも考えがあります」

フフと微笑み静香の笑顔は、可愛いと想像させるよりはやく、恐怖を想像させてくれた。

やばい……本格的にまずいぞ……

だが、こんな状況で良い言いわけなんて生まれるわけがない、というかもはや目の前の二人が怖すぎて、マイナスにしか思考が行かなくなつてきている。

俺、ここで死ぬかも、精神的な意味で……

「どうしたの将君……はやく答えて？ ジゃないと家畜が大変なことになっちゃうかもしれないね」

「これ以上！？」と言つしつゝが出てきたが、今はツッコンではないタイミングだとして、黙認、そして遂に、最後の時が近づこうと……

キ ン

その時、ひとつ店内放送が流れ、一瞬静香達も気をそらした。

“え、これから、第7回レッドファイト公式大会を開催したいと思います。受付されてない方はお急ぎください”

……来た！！ 良い言いわけが思いついた！

「聞いてくれ」一人共、実は今日、この大会のことを思い出して「」今まで来たんだ」

「私たちに黙つて……ですか？」

「それには理由があるんだ」

「それはなんですか？」

「それは……」

チラツと縛りあげられている明みて、心中で合掌。すまん明……

「明から、早く来ない俺のこと」を犯るぞつていう脅迫電話がきたからなんだ」

「んー？ ん、んーー！」

その言葉に、今まで一言も発せなかつた明が驚きの声を上げ、否定するように体をばたつかせながら何かを訴えている。

というか鼻以外が縄で包まれているため、非常に気持ち悪い

「黙りなさい」

すると突然凛が明の腹に向かつて足を落とした。見た目ゆくつりとおろしていたが、あたつた瞬間、明が鼻で「ブツ」という下品な音をたてびくりともしなくなつた。

「ではお兄様、少し待つていてください」

「すぐに戻るから」

「人はもう二つ、仲良く一人で明を持ち上げ、運びだした。

「え？ あの、どいいくんですか、お一人さん」

「「山」」

「んな時だけ綺麗にハモらないでほし……

「ち、ちなみ、なぜ？」

すると「人は、またも綺麗な声で答えてくれた。

「埋めるため」

「それ殺人じゃねーか！！」

「大丈夫ですよ兄様」

将の言葉に、静香が名案を出す。

「深く埋めればいいんですよ。一キロくらい六掘れば平氣です」

聞いたのが間違つていました。

「全然平氣じやねーしー。といつか一キロつてどれだけ時間かけて掘るんだよー。」

「一人だし……5分くらいじゃないかな」

凛が“ねえ”みたいに静香に視線を送り、静香も“そうね”みた
いな顔をする。

「5分!? それもはや機械よりも全然早いよ! じゃなくて埋め
るのダメ! 禁止!」

「「え~~~~」」

え~~~~つてお前ら、ていうか本当に仲良く見えるな!こいつら、姉
妹みたいに見えるわ。まったく嬉しくないけど、

「じゃあ海ポチャ? でもここのから海は少し遠いですよ。お兄様」

静香が困りました。みたいな顔をし、凛は「タクシー呼ぶ?」と
か言い出す始末。

「え? なに、もう殺すこと前提に話進めてるの? だめだよ?
殺しちゃ」

将の言葉に、二人は一瞬きょとん、という顔をした。

「なぜです? ここのはお兄様を犯しつなびといつ羨ま...いかがわ
しこ」とをしようとしたんですよ?」

「やつだよ。この芋虫は将君を犯りまくるつてこつすばら...ひ
どこ」とをしようとしたんです。死んで当然だよ」

「待てお前ら、言葉の途中途中に決して聞き流していけない単語が

聞こえたぞ

「「そんな」とないです（よ）」」

二人はきりりとしながらじ migliorを見るが、口から涎が垂れていた。
こじつらとはもう少し……いや、かなりの距離を置いたほうがいいのかもしれないな。

それにしても困ったことになった。今の二人はもはや一心同体くらいいのシンク口率をほこっている、何とかしないと明の命がリアルで危ない。

「じゃあ山で

「そうね」

いつの間にか相談を終えた二人は勝手に納得し、将を無視して出口へ向かう。

まづい……何かないか？ 何か……

しかしもうそんなことを考へていられる時間がない。将はほぼアドリブで、思ったことを口にした。

「俺は、どんな理由でも、人の命を奪う奴は大っ嫌いだ

ゴトン。

何かを落とす音は響き、見ると、一人がいつの間にか明を落とし、

縄を一瞬で回収していた。

「本當です。人の命は大切にしなければいけません」

「当たり前だよね」

先程とは打って変わり、一人は命の大切さについて語りだしていった。

さつきまで人を殺そうとしてた奴らが言つたか？ でもまあ、無事に終わつたならこれでいいか。

「でも、こいつとも色々と決着をつけなくてはいけません」

「そうだね」

さつきと、今だ意識を取り戻していない明の頭を蹴り、意識を帰還させた。

「あれ？」 これは

まるで死の淵から帰つてきたような声を出す明。

「ようやく起きましたか……ではみなさん、行きましょう」

静香はそれだけ言つと、さつさと歩きだしてしまつ。凜もそれに続くよに歩き始める。一方将と明は、何が何だかわからないと言つた状態になり、聞きなおす。

「は？」 どうした？

静香はゆっくりと振り返ると、笑顔で答えてくれた。

「もちろん、レッドファイトの大会受付に決まってるじゃないですか」

なぜだろ？、このときなぜか、体に悪寒が走るのを感じたのだった。

ねむけ～？ 新崎 凜（前書き）

今回は新崎 凜のイラストを公開いたします。下手ですが参考になれば幸いです

おまけ？ 新崎 凜

新崎
凜

17歳 高校2年生

好きなもの 将、歌、映画

嫌いなもの 将に近づく雌、静香、苦いもの

得意なこと 歌、演技、棒術

苦手なこと 父

将来の夢 静香と同じ、将との幸せな家庭生活、子供は3人はほしい。

呼び方 将君

頭脳明晰、スポーツ万能、容姿端麗

というか容姿を説明していませんでしたね。容姿はストレートで腰まで伸ばしている、母が外人の関係で髪が純白、胸はC

小学校から中学まで将と一緒にいたが、将とある約束のようなことをしてからアイドルになる。大まかな目的は金集め、将と不自由ない生活を目的としていたからだ。しかし最近になって、静香が将を狙ってきたため、アイドルをやめ、将にアタックするために帰つ

てきた。

イラスト貼ります。ちなみにアイドルをしていた時のイラストです。

べ
た

> .i 1 6 5 0 5 - 2 2 5 2 <

ねむけ～？ 新崎 凜（後書き）

後書き 感想をいただけたうれしく思います。

最近は、伝助NO32さんの小説、「あなたは科学を信じますか？」のヒロインも勝手ながら書かせていただきました、ありがとうございます。この程度の絵でよかつたらこぐらでも書かせてもらっています。今後ともよろしくお願ひいたします

震・ヤンされ 大会

「なあ将、俺ビビりしちまつたんだ？ 繩で縛られた辺りから記憶が曖昧でよく覚えてないんだが」

結局今は全員で受付に移動中、ビビりせり明は蹴られたショックで記憶が曖昧になつてゐるようだつた。

「ああ、お前が暴走して凛に襲いかかつたから、返り討ひにあつたんだよ」

「ああ……つてええ！？ 僕そんなことしたのか？ まじでーー？」

信じられないという表情で驚く明。

「ああ

すまんな明、だが真実を知るよりはそつちの方が楽なはずだ……

「まじか……俺そんなことしたのか……」

明はショックだったのか、肩を落として落ち込んでしまつた。

「やつぱ謝つたまづがいいよな……

「さうだな

「俺、ちりと謝つてぐるわ」

そう言つて、緊張した面持ちで、前を歩く凛に近寄つて行く明。

「あの、新崎さん」

「なんですか？」

明の声に反応した、凛がゆきへりと振り返る。

「あの、すいません。色々と迷惑を賭けてしまつたみたいで」

そう言つて明が頭を下げて謝罪すると、凛は天使の笑顔のような顔でほほ笑んだ。

「いいですよ」

明がほっと安堵の息を吐くと、凛が「でも」と言葉を付け加え、笑顔のまま続けた。

「将君は私の夫ですから」

「……え？」

凛はそれだけ言い終えると、前を向き直り、すたすたと前を歩いていく。一方明は言われた意味がわからず、ただ立ち竦くしているよつだつた。

「俺……何か間違つてたか？」

「気にするな、行こ」

立ちひらくす明を慰めるよつて肩を叩き、一人のあとを追いかけるのだった。

受付に行くと、十数人の様々な年齢層の人々が大会のエントリーをしていた。

「なあ静香、なんで大会なんかに出るんだ？」

なんとなく理由はわかっているが、念のため確認をとつておこつ。

将の素朴な質問に、静香はあっさりと答えてくれた。

「そんなの今朝の続きに決まつてるじゃないですか、お兄様」

やつぱりそうだったか……

「と、い、う、こ、と、は、」この大会で優勝した人が好きなことを一つ命令できるつてことか？」

「わ、う、こ、う、こ、と、です、」

それを確認すると、つい溜息をついてしまつ。さすがにこれ以上この二人から逃げることはできないだろう。だとすると俺が勝つしかないわけだ……

「お~い、早くしないと受付終わつまつぞ~

話に関係のない明は、一足先に受付を済ましたらしく、呼びかけてくれた。

「では行きましょう」

「ええ」

「人が己の願望のため、やる気満々なオーラを出しながら歩いているのを見て思った。

これはもう……覚悟を決めるしかない」と……

「では、こちらにプレイヤーネームをお願いします」

三人で受付に行くと、店員から紙とペンを渡された。

プレイヤーネームとは、大会で使う偽名のことだ。ちなみに将はいつも使っている「将軍」という名前を記入する。

それにしても……

書き終わった紙を渡し、自分たちの周りを見渡してみると、みんながこちらに注目しているのがわかる。。

「あの子たちめっちゃ可愛くない?」

「近くにいるの彼氏か?」

「それはないだろ」

やはりといづべきか、静香と凜はものすごい注目を集めていた。本人たちはまったく気にしていないうだが、正直居心地が悪い。

「これでお願いします」

視線の嵐に攻撃されていると、そのすぐ後に静香たちも登録を終え、トーナメント表が完成するのを待つ。

そして待つこと五分、トーナメント発表の時、白いホワイトボードに一人一人のプレイヤー名が、アミダ状の線に書かれていく。

力男

ハンバーグ

将軍

あ、俺だ。対戦相手は

神聖なる口リ

俺の最初の相手大丈夫かよ、あんな堂々と口リ「コン宣言するなんて……あるいは勇者だが、

そんな時後ろから聞き覚えのある声が聞こえてきた。

お、最初の相手は将か

つてお前かよ……

明が口リでした。

あれ？ 知らなかつたのか？

お前口リ「コンだつたのかよ……」

うん少し違うな、俺は神聖な口リ「コンだ

「神聖な口リコンってどんな口リコンだよー。」

「それは素人に言つてもわからなこと思つぜ?」

自信満々に言つ明を見て、なんかつっこ込む気が失せた。

「もういいや……」

明の知りたくない秘密を知つてしまつた。まあ隠してないみたいだけど、隠してた方がよかつた。将の中の明が変態口リに変わつた時だつた。

そんな口リコン明を放置し、残りのトーナメントのメンバーを確認する。

無双

将は私の夫

パン屋

ラーメン醤油

無敵艦隊

将の妻

……

「おい、これはなんの羞恥プレイだ?」

明らかにおかしなプレイヤーネームを指さしながら一人に問う。

「「何が?」」

静香と凜は、ほぼ同時に頭を傾げる。

「何が？ じゃねえ！ あれどう考へてもおかしいだろ！ しかもこれだと俺が一重結婚みたいになつてんじー！」

しかも高校生で！

そんな暴走しかけている将の頭に、静香がやさしく手を乗せる。

「安心してくださいお兄様

「何を？」

「お兄様は私の夫です。あんなG、Jとかも私はしません」

「こやそじじやないよ？！ 俺が言つてるのは

話を理解していませんでした。

「Kの分際で私に勝とうって言つの？」

そこでまた間違いを理解していない凜が乱入し、静香に掴み掛かつて行く。

「あなたみたいなGなんかじや、お兄様が汚れるだけよ。早く消えなさい」

「将君がKなんかの相手をするわけないじやない。無駄な希望は捨ててさつさと他の男にでも寄生しなさいよ」

とても女同士の口喧嘩とは思えない迫力に、周りの一般人たちが距離を空けていくが、二人はまったく気にしないまま睨みあう。

「とりあえず今日で白黒はつきりさせたやるわ

「当たるのは最後みたいね。ま、あなたが負けてなければ話だけど」

一人はふんっと言つと、自分たちの試合の台へと歩いていった。

まさか俺……負けたら結婚させられるのかな……

将は心に深い重みを抱えたまま、自分の対戦台へ移動した、

「それではこれより、大会を開始します」

そして店員の合図と共に、俺たちの戦いが始まった。

震・ヤンされ 帰宅…

合図と共に、モニターに映し出された一人のキャラクターが激しく動き始めた。空中、地上、で激しくガードと攻撃が繰り返されている。

一人が共通しているのは、小パンしか出さない。ガードは全て当たる寸前、投げ抜けはC.P.I以上ということだ。

投げ抜けに関しては、投げられるときに出でてくるピッククリマークのアイコンが見えないほど高速な投げ抜けだ。

といふか良くゲームが反応してると思つよ。

この大会は2回戦方式で、先に一本勝ちした方の勝利といつ、まあ普通の大会とさほど変わらないのだ。

大会中、一人の威圧か何かのせいなのか。周りの観客まで黙りこんでいる。ふつうはこんな戦いがあつたら動画を取ろうとする奴とか出てきそうだが、誰も何も言わず、ただ黙つて試合の行く末を見守つた。

つてかこの戦いは終わるのか？

今だライフの減らない一人を見て、溜息を零す将であった。

「……では、今日の大会はこれで終了します。ありがとうございます」といいました。

店員のお礼の言葉で大会は締めくくられ、終わりを迎えた。

まあ結局、決勝戦の結果は

「あと少しで倒せたんですよ？」お兄様

「それはこっちのセリフです」

二人が両腕にしがみ付いて喧嘩をしている。

結果は引き分け、二人は結局タイムアップという結果になり、お互いのノーダメージのため引き分け。勝者はなしだ。

ということは、あの賭けも必然的になくなるわけで、俺にとつてはこれ程いい終わり方はなかつたと言える。めでたしめでたし

「もしかしてお兄様。“よかつた、賭けはなしか”とか思つていらっしゃいますか？」

「え？」

なんで分かつた？

「顔に出てるよ将君」

凛に指摘され、思わず表情を硬くした。

「まあでもほら、勝者は結局いなかつたわけだし、あの賭けはなしでしょ？」

「何を言つてゐる将君？　あの場合は一人が優勝つてこつことにな

るんだよ。」

「やつです。ですからあの約束は健在ですよ」

「は？ いや、俺一人のお願いなんてかなえられないし」

色々な意味を含めてね。

「大丈夫です、二人の願いが同じなら、不本意ですが一緒に問題ありません。」

「私もかなり嫌だけど、それしかないなら仕方ないから我慢する」

嫌ならやめろよと思いつながらも、一人は勝手に話を進行させていく

「一応聞くが、なんだ？ そのお願いって奴は……」

すると将の言葉に、しがみ付いていた一人が同時に見上げて言った。

「「デート」」

……「デート？」

？ 「デート？ 喧嘩勃発？ 病院行き

」の三つが頭の中に思い浮かぶ。

行きたくねえ！！

そんな将の考えに感づいたのか、じっと凛が見上げてきた。

「もしかして将君、今行きたくないなんて思った?」

「いや……そんなこと……ない」

本当はそんなことあるんだが、凛の上目使いが妙に可憐いと思つてしまい、つい顔をそらしてしまつ。それに気付いた静香に腕に力を入れられ、痛い思いをしてしまつた。

「じゃあ決まりですね。今度の土曜日に開始とこいつで」

結局流されるまま、デートの日程は決まってしまった。俺将来確實に尻にしかれるだらうなと感じながら、帰りの道を歩いていく二人。

その中で、将はただ一人感じていた。

周りの視線……痛いです。

あれから時間が経過し、せっかくなので色々デパートを見て回つたりしていると、いつの間にか夜の7時になつたところだった。ちなみにロリコンは修行するらしく、バイト代を全ておろして再びゲーセンへ行つてしまつた。

今はようやく駅に着き、自宅に向かつて歩いている時だつた。

「すいません。今日はこれから用事があるので、ここで別れさせて

もりこめか

言いだしたのは凛であった。あと少しで家に着くと、凛が腕から離れてそう言った。

「わざわざ迎えなきことよ」

「静香、やさなことばつなよ。でもこんな時間で元気でいいんだ？」

鋭く冷たく、静香の頭を「シンシン」と睨ながら、凛にその理由を窺う。

「うそ、少し野菜を買って八百屋」

「ああ、やうこわいとか、なりまたうで食べたりどうだ？」

「ハセ千鶴さんのことだから、文句を言つてしまつてくれるだらう」

一番の問題である静香は、「今日せもつ頭洗いません……」とか汚こいとを言つてこるので、ほおつておけば問題ないだらう。

「うそ、今日せもつ頭洗いません」飯のことをかもあるし

本当に残念そつな顔をしながら頭を下げる静香。

「せつが、なら仕方ないな。また明日学校で会おう」

「はー、では」

笑顔で別れを告げると、凛はゆっくりと歩いて行った。その背中を見届けると、自分達も再び帰路に着いた。

「ほら、いつまでもぼーっとしてないで俺達も早く行くぞ」いつまでも頭を撫でている静香を置いて、将はゆっくりと歩き始めた。

その後、家に帰るまで、静香はずつと外で放心状態だつたらしい。凛は将達と別れた後、商店街を突き抜け、真夜中の学校へと訪れていた。

「みんな集まつてくれましたか？」

場所は校庭、目の前には、たくさんの男子達がうようよと群がつてきている。これらの人間は全て凛の親衛隊、もといファンクラブだ。

「突然どうしたの？ 学校なんかに呼び出したりして」

「それには理由があります」

誰もが思つていることを代弁する男子に、凛は先程から持つているものを前に突き出し、場を静寂させた。

持つてているのは槍のよつた棒だ。凛はその棒を地面に突き立て、まっすぐにファン達を見て、切り裂くよつた鋭い声で言った。

「これよつ……桐ヶ谷 将を殺します」

男子達は、一瞬凛が何を言つてゐるのか理解出来ていないようだつた。だがそんなこと知らないといった感じで、更に言葉を進める。

「誰かこの中で、私と一緒に桐ヶ谷 将を殺しに行きたい。もしくは半殺しにしたい人がいたら、前に出てください」

「この言葉に、全員顔を見合わせ不思議に思つたが、一人の男子が前に出ると、我先にと、次々と男子が前へと出でくる。

普通に考えれば、昨日までべつたり将にくつついていた凛が、突然こんなことを言い出すなんておかしいと思つはずだが、今のファン達には、日頃から溜まつてゐる将への恨み、妬みで、そんなことを考えもしなかつた。

そして1分も経たずに、ほぼ全員が前に集まり、和氣藹藹と話をしていた。

「どうやつてやりましょつか

「とつあえず3回は殴りたい

「俺も！」

などの会話だ。

そんな男子諸君を、凛は笑顔で出迎えた。

「集まつてくださいましたさん、ありがとうございます！」

ペ一一りとお礼を言つと、そのまま集まつたものたちの人数を数え始める。

ざつと田ちよいへらいかな？ ビーフよつ、思ったより時間借かりそうだ。

もう一度見渡して、仕方ないか、と諦めを付けると、地面に突き刺した棒を勢いよく引き抜き、構えを取った。

「ではこれより、将君の敵を排除させていただきます」

凛の言葉に、敵がえ？ といつ表情に変わるのが分かる。

そして凛は田の前にいる敵に向かって突っ込んでいったのだった。

震・ヤンヤれ… 風呂…

……なんで「んな」と云なつたんだろ？
将は湯船につかりながら考えていた、この状況は一体なんなんだ
ひつじ

チラツと横田でシャワーの方を確認する。

「お兄様、髪の毛洗つてくださいよ」

セイには、生まれた姿のまま座つてゐる義妹の姿があった。

「こんな状況になつた理由を知るには、今から少し前、帰つてきた
直後に振り返る必要がある。

「いりやひまでした～」

帰宅した将達は、ご飯を作つて待つていてくれていた千鶴さん達
と共に、夕飯を一緒に食べた。

お腹もいっぱいになつたし、それなりに風呂にでも入るかな。

やつ考えながらお腹を押せえて云ふと、実も「ご飯を食べ終わつた
よつで、食器を台所へと運んでいた。

セイで最近実と風呂に入つてこないことに嘆き、台所に届くへ
りこの音量で声を出す。

「実～たまには一緒に風呂入るの「ブー————！」」

実を風呂へ誘おうとしたら、反応したのは実ではなく、田の前でお茶を啜っていた静香で、全力で顔面にお茶シャワーをお見舞いしてきた。

おかげで机も顔もお茶だらけにされてしまった。

「突然何を言い出すんですか！　お兄様！」

「お前は一体何を吹きだしてんだよ！」

近くに置いてあつたティッシュで顔と床を吹きながら静香を睨むと、顔を赤くしながら静香も睨み返してきた。

「そんなことより！　実君とお風呂なんて！　何考えてるんですか！？　まさか……ショタ……なんですか？」

「ちげーよー！　別に兄弟でお風呂入つてもなんの問題ないだろ！　！」

相当なショックを受けたのか、静香は俯き、何か一人でぶつぶつ言いだしてしまった。

それにしても静香のせいで顔がベトベトだ、先に風呂入つちまつが。

「静香、実が来たら先に入つて言つとこてくれな」

何かにやにやしだした静香にそれだけ言つて、コビングを出で、風呂場へと移動した。

浴室に辿りついた将は、服を脱ぎながら、先程の静香を思い出して何か嫌な予感がよぎるのを感じた。

だがさすがに顔面べとべとでの状態でベッドに入るほど、将は落ちぶれていない。

服を脱ぎ終わり、風呂場へ入ると、せっかくシャワーを顔面から思いつきりかぶつた。

「あ～気持ちいい～なんか何もかもどうでもなつてくるな～」

そのまま髪と体を念入りに洗つてから、風呂へとダイブ。

「あ～やばい～これ

つい声が漏れる。足から全体に伝わつてくる温かさの虜になりなりそうだ。

お湯の気持ち良さに心も体もゆつたりしていると、ガチャッと浴室の扉が开く音が聞こえた。

そういえば実と風呂に入るのなんて久しぶりだな～、静香達が来る前は結構一緒に入ることはあつたけど、最近は全然なかつたからな～

昔明に「お前ブラコン過ぎだろ」と言われたことがある。あの時は否定したが、今考えると間違いではなかつたかもしない。

ガチャツ

そんなことを考へてこらへし、浴室から

「お邪魔致します」

寒ではない体が出てきた。

「……」

奥へ見ると、体は雪のように白く細くて、それでも出ているところはしつかり出ており、美しい長い黒髪が垂れ下がっていた。

そして不意に田代が合つた。

「そんなに見つめないでください」お兄様

「し、静香ー？」

ポツッと顔を赤くする静香、ここまでも見て初めて理解した時は、慌てて首を向ける。

「なんでお前が入つてくるんだよー。」

「なんでお前が入つてくるんだよーか別に」

「こやどいがんでも良くないでしょー。」

「でもお兄様が言つたんじやないですか

俺が言つた？

テンパリながらも必死に考えるが、まったく覚えがないので聞き返して見る。

「何を」

すると静香は即答で、

「兄妹だからおかしくないって」

と答えた。

「いやせつひの兄妹じゃないからー。」ひのの兄弟、弟の方だよー。
どうこう勘違いしたらせつひの変換がされるんだー？

今さらながら妹に恐怖した将だった。

「そりなんですか？　まあいいじゃないですか、兄妹なんですから」

しかし静香の方はあるで気にしないよつた素振りを見せてくれる。
更に、何かを思ついたように「あー」と声を出す。

「もしかしてお兄様……意識します？」

「し、してねえ！」

明らかな挑発だったが、ひのは否定しておかない、兄として、

兄妹として色々ダメになりそうなのでしかたがない。

「もう少しごんじ」と予想していたが如く、静香はつれしそうな声で話を続ける。

「なら別に問題ありませんよね」

「いや、でも」

それでも何とか止めようとする将に、それを聞いた静香は喜びから一転、悲しみに満ちた声で言った。

「それとも私は兄妹ではないと聞つたですか？」

おやらく演技が混ざつていてるのだから、わかつてはいるが、もはや将には彼女を止めることはできなかつた。

と、まあ結局今に至るわけなんだけどね。

「お兄様聞いてますか？」

「自分で洗いなさい」

「えへへ」と文句を言つ静香はしづらくの間ぶつぶつ言つていたが、将が無視を続けると、すぐにまた別の手口で仕掛けてきた。

「仕方ありません……」

はあ、と後ろから静香の溜息が聞こえてくる。

やつと諦めたか？

「叫びますか……」

「やめてください……」

悲痛の叫びが風呂場に回さに、静香は確實に将を嵌めていく。

「じゃあ、わかつてますよね？」

「んなところで悲鳴なんて上げられたら、俺の人生大変なことになってしまふ。

静香の言葉に、将は小さく頷く」としかできなかつた。

「じゃあとつあえず」ひつひつ向いてください。それでは洗えないですよ」

「お前ちやんとタオルとか巻いてるだろ? な?」

「大丈夫ですよ」

本當か？ と少し疑うが、このままだと本当に叫ばれるかもしないので、おそるおそる振り返つてみる。

するとそこにはタオルを巻いた静香の姿が

「つてタオル小せえ!」

「何か問題が？」

振り返つて目にした静香の体には、本当に大事な所しか隠していない、スポーツタオルが乗つていてるだけ、胸の部分は長い髪でなんとか見えないで済んでいた。

「なんでそんなタオル使つてるんだよー！」

しかもスポーツタオルの中でもかなり小さいし！

「え？ 困りましたね。これ以上小さいのはないんですよ」

「なぜそつちに発想がいく！？」

どう考へても静香の脳の処理はバグつている！

「あ、ハンカチがありました！」

「おおー、と少し驚いた顔をする静香を見て、

「……もう髪を洗わせてください」

将はわつわとこの生き地獄を終わらせよつ諦めた。

「お願ひしますね」

静香の背後に周り、腰にタオルを巻いて少し冷たい椅子に座ると、前から手渡されたシャワーとシャンプーを受け取る。

とりあえずあまり意識しない方向で、静香の背中にかかっている長い髪を触る。

めつねやナリカラしてゐな……

こつも綺麗だとは思つていたが触つてみるとまた違つ、指を通すと、絡め着くように指の間をすんなり通り、一本一本に光沢があるのか、髪の毛全体が神秘的な美しさを醸しだしていた、

さらに匂いも全然違つていた。いつも自分のと同じシャンプーを使つてゐるはずなのに、静香の髪からは、甘い華のような香りが漂つてくる。

女の髪つてみんなこんなもんなのか？

「お兄様、触つてから既に5分32秒経過しているのですが、まだくんかくんかしますか？」

「してねえ！」

静香の言葉に一瞬ドキッとして、急いでシャワーで髪を洗い始める。髪を一通り水で濡らすと、手にシャンプーを適量出し、静香の頭を

「ワシャワシャと洗い始めた。

「お兄様、ひとつ質問ようしこですか？」

「質問？」

「はい、あの…新崎 凜とはいつ知り合ったんですか？」

「どうしたんだ、突然？」

「ただ気になつただけです」

突然の質問に少し戸惑いつつも、昔のこと思い返してみる。

「あいつと出会つたのは中学一年の時だつたな、席替えの時に席が隣だつたんだよ」

「それだけですか？」

「うーん、多分今は平氣だと思つけど、昔はあいつ周りから孤立してたんだよ」

「孤立……ですか？」

以外そうな反応をする静香、それもそのはず、ただでさえアイドルをしていた凛が、昔は一人孤立していたなんて想像もつかない。

「んでも、あいつ髪白いじゃん？ そのせいで周りの男子から色々言われてたわけよ。まあ好きな子いじめだったと思つんだけせ」

そこまで聞くと、静香は一人納得して頷く。

「それでお兄様が助けて友達になつた……といつことですか」

「まあ助けたつていうのは大げさだけどな、そういうひつた」

「……まつたく……それが決定打ですか……」

はあ、と溜息をつく静香、将は何が何だかわからぬまま、とりあえず静香の髪についた泡をシャワーで綺麗に洗いながした。

「ほれ、終了」

「ありがとうござります」

「んじゃ、俺はもう上がるな」

「はい」

静香にしてはいたきいになと思いつつ、将は風呂場から出て、壁に掛かっているバスタオルを手に取つて、体を良く拭いく。

風呂から突然飛び出してこないかをチラチラ見ながら体を拭き終えると、洗濯機にバスタオルを突つ込み、将は自分のパジャマへと手を伸ばし 止めた。

理由は簡単だ、なんてつたつて自分のパジャマの上に、見慣れないピンクの布地が置いてあつたからだ。更にそれを見つけた瞬間に、静香の声が耳に響く。

「それ脱ぎたてなんで使ってください。お礼です・」

彼女のパンティーでした。

「いらねえし使わねえよー！」

「あ！ あと使つたら洗わないで返してくださいね！」

「だから使わねえって！」

叫びながらそのピンクのパンティーを洗濯機の中に叩き込むと、
急いで着替えて、自分の部屋へと飛び込んだ。

何考えてんだよあいつは……

溜息をつきながらふらふらとベッドに座ると、静香のことを考え始める。すると先程見た裸体が脳裏に浮かびあがつた。

頭の中の想像を振り払うように頭をふん回すと、逃げるように布団の中へと逃げ込む。

悶々とする気持ちを抑えながら、将はそのまま眠りについていつ

た。

翌日、相変わらずの騒がしい朝を送つて学校に出発すると、玄関の前では凛が待つていて、一緒に学校に向かうことになった。もちろん静香は不機嫌だったが、

「それよつあなた、昨日何をやつていたの？」

それは珍しく静香から凛へ向けての質問だった。何かを探るような目で凛の顔を見据えているが、一方の凛は無表情だ。

「質問の意図が読めませんね、私は昨日買い物をして帰つただけですよ？」

「そうだぞ、昨日それで別れたじゃないか」

何を言つてるんだ？ 静香の奴。

なぜかこちらの顔を一度確認すると、静香は呆れたよつて溜息をついた。

「……はあ、何でもあつません」

結局その後も他愛ない話していると、すぐに静香達は学校へと迫りついた。

階段を上り、二階にある自分達の教室に足を踏み入れる。するとそこで最初に足を踏み入れた将が、あることに気付いた。

「おはよう～つてあれ？ 人少ないな」

教室の中を見渡すと、やうやくチャイムが鳴る時刻だと叫ぶのよ、元のひづのよだ。

「なるほど……」

呴いたのは静香だった。まるで全てを語ったように手を細めると、そのまま自分の席へと座ってしまった。

続くように将と凜も自分の席へ座ると、静香に問いつ。

「なあ、なるほどって、何かわかったのか？」

「いいえ、何でもないですよ、お兄様」

「そ、そつか？」

「ええ

それだけ言うといつもの笑顔を向けてくる静香に、これ以上何もきけなくなってしまった。

その後すぐに入ってきた先生の話によると、このクラス以外の多くも男子生徒が風で休んでおり、中には通り魔に怪我を負わされた生徒もいるらしい。

話を聞いた生徒たちは皆ざわざわと騒ぎ始めた。それもそうだろう。これだけの人数が同時に風を引いたなんて、普通に考えたらまずありえないだろう。

ならなぜ休んでいるのか？

皆一様にそれを考えるが、誰もそんなものわかるはずもなく、昼休みになると、ただの面白い話題へと変わっていた。

「お兄様、お昼飯にしましょつ」

「ああ」

いつものように、静香が青い四角い弁当箱を将の机の上に差し出し、将もそれを受けとろうとするが、

「将君、実は今田は私もお弁当作つてきたんです」

「え?」

なんだと?

その横に赤く丸いお弁当が並べられる。一つにお弁当を前にした将は、とても嫌な汗を流しながらお弁当を見比べ、正面を見た。

うわ~

予想通り、二人は威圧たっぷりの笑顔で見つめあつていた。

震・ヤンヤれ…忠姫…

「おまえではまずこと感じ、教室内にこるであれい昭を探そうとあたりを見渡すが、食堂にでもこつてこいるのか、姿が見当たらない。

「おまえでもこく時こくねくせに重要な時こくどりに行つてんだあいつ…

「申し訳ありませんが、お兄様は私のお弁当を食べるのではしこので、あなたのおまえのお弁当など手をつける暇がありません」

「それはあなたではなく将君が決める」とだよ。まあ私のお弁当とくのお弁当とじゅ話にならなこと思ひナダ」

「では決めてもうこましょつか」

「ええ」

一人は睨みあつのをやめねど、丁寧にお弁当の包みを解いた。

「おお」とクラス全員が思わず感嘆をついた、もちろん将もその一人だ。

どちらのお弁当も観栄えよく整つており、栄養バランスを気にしているのか、野菜などもしっかりと織り込まれてこる。

そんな一人の弁当の大きな違いはたつた一つ……

肉か

魚か

それだけだった。

具体的になんて料理かはわからないが、静香の料理には肉が、凜の料理には魚がメインのおかずになっていた。

つてことは今田の気分で選んでしまえば問題ないか。

そう考えた将は、ただ簡潔に、肉か魚、どちらが食べたいかを考え始める。

「やつです、ただ勝負するだけではつまらないので、勝った方は賞品をもらえる」とこじましょ「

その突然の提案をしたのは静香だった、まるで勝利確信しているような、挑発的な余裕を見せながら凜を見る。

「いいですね、で、その賞品とは?」

相変わらず当の本人に關係なく話が進められていくが、まあお弁当を作つてもらつたんだし、たまにはいいかなとも思つ。

「将君の脱ぎたてのパンツで」

「ちょっとまつて静香

「良いでしょ、望むとこです」

「望まないで…」

思わぬ賞品内容に、隼の如く異議を申し立てるが、やはりスルーの形で終了。

「お兄様のパンツを持つて帰るのは私です」

「いいえ、私が持つて帰ります」

「え？ 何？ 倆この場で脱ぐの？」

「この年で変質者の仲間入りですか？」

「ああお兄様」

「どうちか選んでください」

さう言つて二人がお弁当を前に差し出してくる。

どうする？

「俺はんを食べるのを我慢するか？」

それとも腹いっぱいになつて変質者への道を行くか？

「一つのお弁当を睨みつけながら、思考をめぐらせる」と数秒、

「つて！ そんなの考えるまでもねえ！」

「お兄様！？」 「将君！？」

将は全力で走りだした、扉を乱暴に開け、一人声が聞こえないよう耳を手で塞ぎながら、廊下を駆け巡る。

俺はまだ健全でいたい！！

飛び出した将を見て、静香は追いかけることもしなかった。いつもなら地の果てだろうが一瞬で追いかけて捕まえることができるが、今日はそうしない。

「それで？ 何か用？ 将君を遠ざけたりして」

隣から聞こえる凛の声、全て見透かしている物言つに驚きもせず、静香は向き直る。

「聞きたいことがあります」

「聞きたいこと？」

「今日の男子生徒大量欠席のことです、あなたですかね？」

一応周りの生徒に聞こえないよう、声の音量を下げて凛に問う。すると彼女は特に気にした様子もなく「ええ」と答える。

やつぱりGの仕業でしたか……

「じゃあもうやめてください、やつぱり」と

静香の言葉に、彼女は一瞬、豆鉄砲を食らった鳩ような顔をした。

「なぜ？ あこひりは将君に危害を『やぶつ』してたんだよ」

そんなことは百も承知だ、凛がお兄様を思つ氣持ちは、恐い／＼本物である／＼、認めたくはないが……

「やうだとしても……お兄様は優しい人だから、それを知つたらシヨックを受けてしまひ」

「だからやめないと？」

「やう」

顎に手を当てるとい、凛は考へる姿勢を取り、質問を飛ばした。

「ではもし、将君に危害を『やぶつ』したうじりあるの？」

「やうひで手を出せばボロしあす」

「……つまり、手を出さなければ」

「手は出でなー」

「なるほど」

理解したと言わんばかりに頭を縦に振る。

「ひとつあえずよまぬつ」とを聞こしてもおしみつ

「当然です」

話を終えると、広げた弁当箱を再び布に包みこむ。

早く追いかけないと、お兄様が『飯を食べる時間がなくなつてしまつ。

きらんとお弁当を包み終え、レジャーシートを抱えると、お兄様がこるであろう屋上へと向かおつと、教室の扉に手をかける。

あ

そじであることを思い出し、同じく弁当を持った凛の方を振り返り、一言

「あなたには手加減しないですけど」

突然の言葉に、凛も微笑混じりに言い返す。

「それは私のセリフ」

それだけ言つと、一人は廊下を異常な早さで駆け抜けていった。

震・ヤンヤれ 忠臣（後書き）

すこせん、今日は短めです。新しいバイトのせいで毎日へんぐた
です……

震・ヤンされ…発見…

時は流れて放課後、今頃教室では帰りのホームルームをやつてるんだろうなあとか思いながら、白い天井をじっと見つめる。

現在将がいるところは、保健室。

別に病気になつたわけでも、ましてや怪我をしたわけでもない。ただそう、少し食べ過ぎただけだ。

昼休み、将は自らのパンツを守るため、爆走し、逃げ込んだのは音楽準備室。だが、そこにはすでに一人がレジヤーシートを用意しており、弁当も展開済み。

もちろんその場から離脱を試みたが、CGも顔負けの速さで座られてしまった。抵抗しようとしたが、静香から、さつきのは冗談だからたくさん食べてください、と言われた

疑いながらも、走りまわつて強烈になつていた空腹には叶わず、大量にあつた弁当の中身を一人で完食。

「こまではよかつたんだが……

お腹もいっぱいになり、珍しく一人の争いも……少しありながらも、昼飯は終了。仲良く3人で教室に戻ろう。そんな感じで廊下を歩いていると、食い過ぎで少し、少しだけ腹が痛くなり、擦つていると、それに気付いた静香が声をかけてきた。

「お兄様？ どうかしました？ まだ足りませんでしたか？」

「さすがにそれはない……いや、少し腹が痛いだけだから」

「がばつ！」

「は？」

一瞬のうちに視界が90度回転したと思つたら、静香と凜が協力して将を横に抱え、丸太を運ぶように、保健室へ連行。

保健室の先生はどこかに行つているのか、無人の状態だ。

「おい、本当にちよつとお腹が痛いだけだから、わざわざ保健室に来なくても……」

「何言つてゐんですか！　お兄様！」

「そうだよ将君！　おとなしく寝ていて！」

そう言つてベッドに無理やり寝させられました。

「だから大袈裟だつて、別にベッドを使う必要は
なんだこのベルトはー！」

体を起そるとすると、いつの間にかベルトでベッドの上に縛りつけられていた。手も足も巻かれているため、首しかまとも動かすことができない。

「どうか本当に人間技じゃない。」

「だつてお兄様、いづでもしないと無理やり授業に出まつとするだ
ら」

静香の言葉に凜もしきりに頷いて、同意の意思を示す。

「当たり前だ！ といふかこんなことでいちいち保健室で縛りあげ
られてたまるか！」

「G、Jは一時休戦にして、お兄様の薬を買いに行きましょ！」

「スルー！？」

「仕方ないけど、それが今私たちのできる唯一の手ね」

「いや、そんなことよりもJのベルト外す方が先だよー！？」

「じゃあ早く行きましょ！」

「やうね」

最優先目標の一一致を確認するよしに、凜と静香は顔を見合させ、

うん、と一回だけ頷く。

「え？ ちょっと待つて、このままで置いていくのか？ そつなの
か！？」

一人は将の言葉が聞こえていないのか、あつとこつ間に扉の向こ
うへと消えてしまった。

「……まじかよ……」

とまあこんな感じで今は保健室に監禁中なわけだ。静香達ならきっと早く戻つてくれるだろ？

「ほんと、早く帰つてくれることを願うよ」

だつてあいつら、カーテン閉めて行かなかつたし……

つまり今、この瞬間、誰かが入つてきたら、間違いなく将の人生は終わりを告げることになるだろう。

それだけはなんとしても阻止したい。動けないけど……

だが、この時すでに、将の人生は終わりの時を迎えていたのだ。

ガシャンッ！

突然の音にびっくりと反応し、まさかと思いつつ、嫌な予感120%の力で重い頭を持ち上げてみる。

そこにいたのは、大きなウサギのぬいぐるみを持った、小さな女の子が、机の寄りかかるように立つていた。

すると女の子は、体を小刻みに震わせ、大きな瞳を潤ませ、口を金魚のようにパクパクと開け閉めを繰り返しながら、片手でこじらを指さした。

「へ、変態さんがあります！」

将の人生が終わりを迎えた瞬間でした。

震・ヤンされ 発見（後書き）

遅くなりました。春休みに入ったので、毎日書いていこうと思いま
す。感想あつたらうれしいです。よろしくね～

女の子は小さな悲鳴を上げ、ペタソシと地面に尻もちをついた。

「お、じゆう」

「ぐ、変態さんがしゃべりました～！」

「変態じやねええ！！！」

「ルルル」

将の怒声に、びっくりと体を震わせるとい、ウサギのぬごぐみに隠れるように小さく丸くなつた。

「ああ、うん！ でも本当に変態じゃないんだ！」

「変態さんじや……ないですか？」

よかつた、なんとか誤解は解けそうだ。

「うん、違ひよ」

「じゃあ、どう変態なんですか？」

「そりゃあ、って違うやー。普通だよ、ノーマルだよー。」

「ふ、普通の人はそんなことつぶせん」

ぐつー 確かにその通りだ。もし立場が逆だったら間違いなく自分も同じことを言つたに違ひない。

「いやにまの……海よりも深い事情があるんだよ」

「海よりも深い……？ 事情に深わなんもあるの？」

「え？ やじ聞ぐ？ どうだらう、考えたこともなかつたけど……」

「やうなんですかあ」

「うん……つてやんなことせびつでもここよー それより事情を聞いてくれ

なんなんだ」のナは……

少しおかしな女の子に翻弄されながらも、将はなんとか事情を説明した。話終えると、女の子はゆっくりと立ち上がりながらも、疑いの視線を向けてきた。

「座しやー50%です……」

やうやう簡単に信じてもらひやるわけないか。

「や、それよつて、君はなんでこんなとひに来たの？ どこの具合…せんせうだじ、座我でもしたの？」

将は誰かを呼ばれたら困ると構え、なんとか女の子のことをこと

ざめみつこする。

「わ、私はその……帰り道が……わからなくて」

「は、帰り道?」

女の子は恥ずかしそうに顔を赤くしながら、小さく頷いた。

「帰り道つて……いつも帰つてる道でしょ?」

「こつもほその……車でお迎えがくるか?」

「やうなのか? でもなんで保健室?」

「だつて、何か困つたことがあつたら保健室に行ひつて、お兄ちゃんが」

なんて迷惑な兄貴だ。

「住所とか分かる?」

「はー」

女の子はウサギのぬいぐるみの首についているチャックを外すと、中からピンク色の携帯を取り出した。

なんかグロいな……

そんなことを考えていると、携帯を操作した女の子が、こりひりこ画面を向けてきた。

「見づらいな……」

遠田から何とか携帯の画面を覗き、住所を確認すると、近所まで
は行かないが、それなりに「ひで近くの住所だった。

「あ」ならわかるから、紙に書いてあげるよ

「本当にですか？」

「ああ、じゃあ紙とペン貸して貰える

「はーー。」

彼女は元気よく返事をすると、ぬいぐるみを抱えてトコトコと近
づいてきた。小動物みたいで実に可愛らしい。

ちょうど隣まで近寄つてくると、またウサギの首から手を突っ込
んで、何かのプリントの裏と、シャーペンを一本取りだし、お腹に
おされた。

「え？ と、書けないからこのベルト外してもいいでこいかな？」

「や

見事な即答

「じゃあ書けない

「えー！ それは困ります！ なんとかしてください。」

「なんとかするのせめつただよー。」のベルト取つてくれれば何でもしてあげるからー。」

「それはやでやー。」

「なぜそこまでー。」

「だつて外したら、変態さんと襲われてしまーます……」

そう言つて軽蔑の眼差しを向けながら少し距離を取られた。

なんかショックだ……

「襲わないしー。変態じゃないしー。」

「そこまで言つなりチャンスを上げるですよー。」

「チャンス?」

「はー、私が出す質問の答え次第で変態ひどいがどつか見極めますー。」

「おーーー。望むどーー。」

あれ? 僥道教えるのに立場逆じやね?

「じゃあこきますー。」

「」の状況に違和感を覚えた将だつたが、女の子はそんなことをま

るで気にせず、叫んだ。

「猫か犬、あなたはどちらが好きですか？」

「……え？」

「え？ じゃないです！ どちらが好きかを聞いているんですよ？」

「いや、そういうの」とじゃなくて」

なぜ変態から犬や猫に派生した？

すると彼女は、ハツと何かに気付いたような素振りを見せると、ぬいぐるみで少し顔を隠しながら、申し訳なさそうに言った。

「あ、もしかして猫と犬知りませんでしたか？」

「そんなわけあるか！」

「ひうつ！ ジヤ、ジヤあ早く答えてくださいよ」

「だから～ってああもう！」

「ううつ、とまた泣きそうになつてゐる彼女に付き合つてゐるのが、だんだんバカバカしく思い、ほほヤケクソ氣味に答えた。

「犬だよ犬！ 小型犬！」

「犬……」

「ほら答えたぞ……つておい、どうした？」

気付くと彼女は自分の横に立ち、ぬいぐるみの首からまた何かを取りだした。

カッターだ。

彼女はぬいぐるみを地面に落とすと、両手でカチカチッと刃を数センチ出し、今だに「犬……」と呟き、飛び出た鋭い刃を見つめている。

やばい、嫌な予感しかしない。

「おい、落ち着け、落ち着いてそれを捨てないとい。な？」

説得を試みるが、彼女は首を左右に振って、拒否の反応を示した。その目には既に先程の涙は残っていない。あるのは何かを決意した力強い瞳。

「大丈夫……です」

「何が！？」

「すぐに済みますから」

「済ます！？」

やつぱつこの子、殺る氣だ！

彼女はカッターを逆さに持ち替え、両手を皿いっぱい高くあげる。

死にたくないという本能が働き、なんとか抜けだそうとするが、無慈悲にもベルトは将を強く結び付けて離れない。

誰か助け

「えいっ！」

グサツ！

求めた助けは誰にも届かず、可愛い掛け声と共に、刃はまっすぐに将の胸へと吸い込まれていった。

桐ヶ谷 将17歳、こうして彼の人生は幕を閉じたのだった。

DEAD END

震・ヤンデレ DEAD... (後書き)

最近ヤンデレの漫画を探していたら、友達に「未来日記は俺の中で最高のヤンデレ漫画だ」とか言っていたので、昨日試しに1巻買つたら……めっちゃおもしれえ！という感じで深夜1時に全巻買いに行つてしまつた作者です。みなさんも機会があればぜひ一度読んでみてください。

あ、こちらもよろしくお願ひしますね。

麗・ヤンされ 地図

「これだけ買えば平氣ね」

「やう? わたしはもう少し買った方がいいと思つんだけど」

静香と凜は現在、学校から20分程離れた大きな薬局に訪れていた。既に到着してから20分は経過しており、籠の中にはこれでもかといいうくらい薬がたくさん入っている。しかも2籠。

「これ以上は必要ありません。お兄様が今この瞬間も苦しんでいるんです、急ぎましょ」

「それもやうね

一人は頷くと、急いで会計を済まし、薬を買い物袋に詰めて店を出た。ちなみに金額は7万ちょい掛かった。

そんなことまったく気にせず、静香と凜は両手にぱぱに買い物袋を持って学校への道を走っていた。

待つていてください! お兄様! 今行きます。

前を走っている自転車を抜き去りながら走っていると、突然凜が質問してきた。

「ねえ?」

「なんですか?」

「あなた、何で将棋のこと好きになつたの？」

「突然なんですか？」

「いや、少し気になつただけ、まさか一日惚れなんてことはないでしょ？」

凛はせつて静香の方を少し覗く。

私が、お兄様を好きになつた理由……確かに凛の言つとおり、一日惚れなんかではない。だが、お兄様を狙つてゐる奴に、のこのこ教える気もない。

答えを返さずに数分が経つ、一人の間に長い沈黙が流れる。走つている足音でさえ、無音に感じてしまつ感覺だ。

その無音を打ち碎くように、静香は小さな声で言つた

「……ただ、お兄様が初めて私を人間として、見てくれたからです

「……せつ」

教えてしまつた。

なぜわざわざ敵である凛に教えてしまつたのかは分からない。このまま黙つても、おそらく凛は無理に聞いたりはしなかつただら、それなのにわざわざ口にしてしまつた。

なぜ？

自分が凛の過去を知っているからだろうか？ それともただの気まぐれ？

いや……違う。

もしかしたら、私は凛のことを……ライバルだと認めているからかもしれない。

ちょうどその時だった、顔に当たる少し冷たい風の中にあります。を見つけたのは、

「どうかしたの？」

少しスピードが落ちた静香に気付いた凛が、声をかけてくる。

「いえ、何でもないです、急ぎましょ！」

きっと気のせいだ、お兄様があの状況から抜け出すのは考えにくい、たとえ第3者の介入があつたとしても、こっちはお兄様帰宅コースではない。

ともあれ急いで帰ることに越したことはない。

二人は先程以上の速さで走りだしたのだった。

「お~い、何やつてんだ、置いてくぞ」

将は後方にある道の途中でしゃがみ込んでいる女の子を呼び掛け

る。彼女を家に送ろうと保健室から出発して20分程たつただろうか？とつづにしているはずなのに、今だ到着しないのは間違いない彼女のせいだと言えるだろ？

はあ、と溜息をついて、ゆっくりと彼女に駆け寄る。彼女は何かをじ～つと見つめ続けている。

「んで、今度は何を見つけたんだ？」

「これー。これー。」

まるで新しいおもちゃを見つけたように目をキラキラさせながら、堀にくつついている生き物を指さした。

「ああ、トカゲの子供か」

昔良く友達川に取りにいったつけ、おかげであそこらへんのトカゲを一掃してしまったけど

「これ、子供なの？」

「ああ、尻尾が青くて綺麗だろ？ これはトカゲの子供の頃の色でな、大人になると体の色が、変わるんだよ」

今壁にくつついているのは、黒くて光沢があり、尾は青く美しい色をしている。尻尾を切ったことがないためか、より美しく見える。

「大人になると変わっちゃうの？」

「ああ、オスは全体的に黒、メスは茶色になつて、光沢が失われる

な。だからトカゲって言つとみんな結構「ひり」を想像するんだよな

「へへ、やうなんだ～」

彼女は納得したように言つと、再び視線をトカゲへと移した。

「つてそりゃなくて、さつさと行くぞ、遅くなると俺の帰りまで遅くなるんだから」

もう何回もこんな状態が続いている、昆虫や動物を見つけるたんびに駆け寄つていつていいく、まるで小学生の男の子みたいだ。

「はーい」

元気よく返事をすると、ぬいぐるみを抱え直し、将を置いて先へ先へと走つて行く。

なんか、お父さんになつた気分だなあ、なんて思つてみたりもする。この年で言つのもなんだが、

とまあDEADENDになつたと思われた将であったが、この通り今だぴんぴんしている。

（20分前）

「えいっ」

ドスツ

まじかよつ！

今日初めて会つた女の子に突然カッターで腹を刺され、将は激痛に眉を潜めようとしたが……

「あれ？」

痛くなかつた。

どうじうじうとかと首を上げ、腹を見ると、カッターはベルトのうちの一本に見事突き刺さつていた。

「んしょ、んしょ」

彼女は刺さつたカッターをぐいぐい動かし、ぶちつと完全に切り裂く。おかげで腕が動くようになつた。それを見た彼女は、むつふーと得意げな顔をした。

「どう？上手いでしょ！ カッター刺し！」

すごい？ すごい？ と聞いてくる彼女をとりあえずシカト、片腕で、残りのベルトをカチカチと外していく。

ようやく最後のベルトを外し終えると、上半身を上げ、伸びを一回する。そして助けてくれた張本人に向き直る。

「とりあえず、頭出しな」

「え？ 何？ 何？」

疑問に思いながらも、素直に頭を差し出してくれるといひを見ると、

悪い子ではなさやうだ。とりあえずその頭に赤く燃え盛つた右手をプレゼントしておく。

「ゴンッ！ という音と共にクリーンヒットした彼女はキュッ！ とかいう良く分からぬ悲鳴を上げて、その場にしゃがみこんだ。

「とりあえず言いたいことがある、殺す気か？」

まじで人生終わるかと思つたぞああ？

「うう、ひどいです……」

「ひどいのはそっちだ、寿命が3年は縮んだぞー。」

彼女は頭を擦りながら涙田で、将を見上げた。

「助けたんですよ？ 私良いことしたんですよ？ 天使ですよ？」

「どこのがだ！ これ見ろこれ！」

自分の制服の中心を指さす。そこにはカッターが貫通して服が切られたあとが残つていた。服を2枚も貫通しているのを見ると、相当の力が入つていたことがわかる。

というか腹を刺された時の衝撃で少しリバースしそうになつたぞ。

「？ 破れますね」

「違うだろ！ お前のカッターだよ！ カッター！」

「ああ～……？」

本当に分かつていなか、彼女の頭に？マークが出ているのが見える気がした。

「わひいーや」

一応助かつたつていえ、それもまた事実、仕方ないと言わんばかりに、将は紙にペンを走らせ始める。

「？ 何をしてるですか？」

「あのな～、お前に地図を書いてやるつていつ話だつたうつが

「ああー。」

「そういえば！ といつた感じの彼女を見て、大丈夫かこいつ、と思ひながらも地図を渡す。

「とまあえず、そこまで行けばさすがに分かるだろ、俺も完璧に知つてるわけじやないしな」

彼女は将の話を聞いているのかいないのか、渡された地図をガン見していた。

とまあえず静香達が戻つてくる前に退散しどくか、また面倒なことになりそうだし。

ベッドの脇に置いてあつた鞄を手に取つて、外した無数のベルトを回収し、保健室を後にしようと、

「……なんだ？」

したが、制服を掴まれてしまった。

「わかりません」

「何が、と聞こうとしたが、彼女が差し出してきた地図を見て納得した。

「分からぬいつて……つまり送れって言ひたのか？」

「……やつぱり、迷惑ですか？」

彼女はそう言つと、掴んでいた制服を離し、顔を暗くして黙り込んでしまつた。

正直迷惑か迷惑じゃないか言わるとすくなく迷惑だ。これ以上厄介事が起こる前に家に帰りたいと思つ。

将は枯れた花のような彼女を置いて、保健室の扉をあける。

とても面倒だ、が、

「ほれ、さつと行くぞ」

「あ」

「のまま行くわけにも行かんわな。

諦めの溜息をついて、扉を開けて待っていると、再び元気を取り戻した花が、明るく返事をした。

「うん！」

「ねえ～、まだ着かないの～？」

「もう少しだから我慢しろ、ってかいつかまだ5分くらいしか歩いてないぞ」

どんだけ体力ないんだこの女

トカゲやらカマキリなどに気を取られて、時間が経っているようこ見えるが、実際に進んだ時間はまだ5分程度。

にも関わらず、当の本人は、やけに大きなウサギのぬいぐるみを抱いて、道の隅に座り込んでいた。

「疲れた～、もう歩けない～」

俺だつて帰りたいんだよ～!!

思わず殴りたい衝動に駆られたが、なんとか抑え忍んで笑顔を向け、熱い拳をポケットに納める。危ない危ない

「ほら、我が儘言つてないでさつと立て」

「む～、私にこんな重労働をせるとは……あ、いいこと思いつきました！」

絶対にいいことじゃない。

「いやいやいいなや、バツとその場から跳ね上がり、一人満足気に頷く彼女を見て、将はこの上なく不安な表情を作った。

今までの流れから、彼女の提案がまったく嫌な予感しかしないのは言つまでもないだろ？

そんな嫌な予感の塊である彼女は、いそいそとこちらに駆け寄る

と、両手を広げて笑顔で一言、はい

「ど、このわけで、おんぶしてください」

「いやいや自然に言つても嫌だから、しないから」

「え～」といいながら一瞬うなだれた彼女だったが、何かに気付いたようにハツと顔をあげると、みるみるうちに顔を赤くした。

そして身を守るように腕で自分の体を抱きながら、彼女は恥ずかしそうに言つた。

「……たすがに抱つ」は嫌ですよ？」

「いや、お前どんだけ自分の都合のいいように事運んでるんだよ！俺だつて嫌だわ」

「なんだ、じゃあやつぱつおんぶじゃないですか？」

「いやこや違つてしまふ。」

「あ、まさか抱えるのですか！？ 脇に抱えるのですか！？」

「抱えねえよ！ 抱つこしねえよ！ おんぶしねえよ。」

む～、と頬を膨らませながら尚諦めず、おんぶをねだる少女と、それを断固拒否する男子高校生。

まるで仲の良い兄妹に見えるかも知れないが、決してそんなことはない。ただの醜い争いである。

だがいつまでも続くと思われたそんな醜い戦いも、彼女の何気ない”一言”によつて、あっけなく終止符が打たれることとなつた。

「あんまり嫌々言つと、わざわざ保健室のひと学校中に流しますよ！」

200

「これでいいのか？」

……

……

「おお～、楽ちん～」

結局脅しに敗れ去つた将は、羞恥と怒りを抑えながらも、おんぶを実行に移した。

けど仕方ない、もし断つて本当にほりざれたら、学校中の生徒か

「うう、『よ、変態』とこうさわやかな挨拶をされるかもしれないのだ。
せうしたらもう少しお校には一度といけなくなってしまう。

「これでの件は終わりだからなー。」

「わかつてますよー、あ、川口コイが居ますよー。」

「ほらー、ヒ言こなががら橋の下に流れるコイを指さしながら、頭の上
でキヤッキヤ騒ぐ少女。

ああ、このまま「イツ落として帰つていいかな?

そんなことをちよっぴり考えながら、彼女の帰宅路を歩む、将な
のだった。

一方その頃学校では、ちよっぴり静香達が到着したところだった。

「これね……」

保健室に入つて田にしたのは、もぬけの殻となつた保健室だった。
ベッドに寝ていたお兄様の姿も消えていた。

部屋の様子を見た凜が、すぐに隣の静香に口に開いた。

「……どつ細ひっ。」

「そうですね、まず第三者の仕業で間違いないでしょう、まああの状態からお兄様が自力で抜け出すことは不可能です」

「そうね、ベルトが綺麗に回収されてるところを見ると、無理やり連れて行かれたっていう感じでもなさそうね」

「机の椅子の位置や、薬品の位置が変わっていないところを見ると、先生がやったわけでもなさそうですね」

「そして今はまだ2、3年は授業中、となれば、考えられるのは1年が保健室に来て、将君を解放したってところかしら」

冷静に分析しながら、考えられる可能性を上げていく。

静香は、兄が寝ていたベッドのぬくもりを確かめるよう、布団や枕に手をつける。

「……まだ少し暖かいですが、どうやら既に22分程経過しているようです」

「そう、ってこうことはもう家に帰ったのかしい

「それはないと想います」

「なんですよ」

手がかりを探すために薬品などを見ていた凛が、そこで静香に向き直す。

「さっき帰つてる途中、お兄様の匂いを感じました、氣のせいかと

思いましたが、氣のせこじやなかつたよひです

「わひわひ。 でもあひちは将君と帰り道が違つよね。」

「はい、理由はわかりませんが……それともひーひ

やひぱひーれは……

その“何か”に氣がついた静香は、急激に襲い掛かつて来る、怒りの感情を感じ取つた。

“……せ……！”

頭の中で、自分自身が何かを訴えてくる感覚が襲いかかる。

「つツー。」

怒りに感情を支配されぬよう、八つ当たりのように一発枕を殴り付ける、拳は枕を突き破り、ベッドの板まで貫通していた、少し拳に痺れが走るが、おかげで何とか心を落ち着かせることに成功したようだ。

凜はそんな静香に疑問を抱いたが、すぐに興味をなくし、机に置いてあつた薬などを手に取つて見初めていた。

今だ頭に残る怒りの感情を抑え込みながら、なるべくいつもどおりの口調で、冷静に、かつ淡々に、静香は先程の続きをゆづくつと告げた。

「……この部屋に、私達以外の、雌の匂いが充満しています

次の瞬間、保健室に鳴り響いた音は、人の声ではなく、凜が手で握り潰した、ビンの碎け散る音だった。

震・ヤンされ 骨迫（後書き）

久々の更新です。

ここでユーモラーの人にお願いです。

実は今短編を執筆しているのですが、このサイトに投稿するわけにはいかないものなのです、ですが誰かに読んでほしいので、誰か読んで感想をくれる人を探しています。（まだ製作中ですが）もしも読んでくださる人がおりましたら、メッセージか、感想に書き込んでください、お願いします（ちなみに内容は恋愛）。

もちろんこの小説の感想、アドバイスもあればよろしくお願い致します！

震・ヤンされ……ヤクザ……

誰か、助けてください。

突然何を言つてるんだと思われるのも重々承知で、章は叫びたい衝動にかられていた。

汗を流しながら正面を見る将と、その将の背中でおもしろいものを見るように同じく正面を見る彼女、頭の上にウサギの人形を乗せられ、緊張感がまったく伝わってこない。

そんな二人の視線の先にあるのは、真っ黒な車。まるで将たちを通さないよつに横向きに止まっている。

さりに後ろにも同じ黒い車が来て、取り囲むよつに止まる。この車何がすごいって、横になげえ！ 将は車に詳しいわけではないので車種まではわからないが、威圧感はハンパない。

そしてそんな車から出てきたのは、

「おー、その子を返してもらおつか？ ああ？」

リアルヤクザきた――――――！

頭が人間じやない赤色していて、顔にはやけどのような後、さりに3つつのピアスを左耳につけている。そんなにつけて痛くないのかな、とか思つたが、どう考えてもそんなことを聞いていい状況ではなかつたのでやめておく。

そんなことよりも、このヤクザが血つな子とこうのは、まだが
いなく背中に乗つている少女のことを言つてこたのだ。ひだ。

「やこてんのか？」てめえ

「は、はー」

「ならさつわと渡せ」

はーー、さつわ持つてこちやつてへだせーー！

つて言つてすぐこでも渡したいが、たすがにこさんなことまだでき
ない。

だつてさつわ考へても渡したらこの子の人生終わつちやこやうだ。
背中に乗せてこむため、表情は確認できないうが、さつとほえてる
に違いない。

「おー、聞こてんのか？ 早くしねえと散らすぞ？」

何を――――――――！？

さつじよつ、さつすれぱい？ こままだと間違になく一人と
も散らされてしまつ、何かはわからぬけど何かを散らされまつー。

冷静にさすればここのか考えようとするが、テンパりすぎてつ
まく頭が回らない。

せめてこの子だけは、とかここことを考えるも、やつ都合よ

くそんな案は閃いてこない。

「」までは、汗を頬から流し、将がそつ脱したそのとき——

「もう、豆男さん、そんな怖い顔しちゃダメですよ、めつー。

「あ、へいー、すいやせんお嬢ー！」

背中から、可愛い声が聞こえた。

しかも、わざまで殺す勢いのガンを飛ばしてきていたヤクザが、将に向かつて深々と頭を下げてきた。

いや違う、正確には、将の背中に乗つている彼女に頭を下げている。どうしたことだ？

とりあえず話が見えない将は、背中に乗つている彼女に問いつめる。

「な、なあ、このお方は、お前の知り合いなのか？」

「ああんーー てめえ！ お嬢にお前呼ぱりとは、殺されてものかー！」

「いえーー、滅相もござりませんーー！」

すじい形相で迫つてくるヤクザの顔に、反射的に敬礼のポーズを取る将。

だが、そんなヤクザさんの頭に小さなゲンコツが落ちた。

「もひー、豆野さん！ダメだつていつたでしょー。」

「はー、申し訳ございません！お嬢ー。」

わわわわと後ろに下がつて再び後ろに下がるヤクザさん、未だに話はよく掴めていないが、二人のやり取りを見る限り、ヤクザさんの名前は豆男というまつたく似合わない名前をしており、背中の彼女に頭が上がらないらしい。

すると突然、頭をポンポンと叩かれ、「もひ降りしてくれていいよ」と言われた、将は黙つて腰を曲げると、背中に乗つていた軽い重量感がなくなつたことに、少しそれとわかる。

一方背中から降りた彼女は、まつすぐ豆野さんの元へと駆け寄つて行く。

「ただいまー、豆男」

あんな怖い人を呼び捨てにするとは、コイツ実はかなり肝座つてるのか？

そんな彼女を豆男さん？ が温かく迎い入れる。

「お帰りなさいやせー、お嬢ー。」

豆男さん？ は美しい姿勢頭を下げる、そのまま将の方へと視線を飛ばした。

「どひるどお嬢？ じの殿方とは一体どうこいつの関係で？」

口調自体はとても優しいのだが、目には確實に殺意が籠つていてる。

もしも保健室での一件がバレたら、このまま東京湾に沈されるくらいにやばい目をしている。

は けど大丈夫！ わつきのおんぶで、その件については他言無用な

「保健室で秘密を共有する仲だよ。」

即刻バラされた

「ほ、保健室！？」お、お嬢！そこで一体何が！？」

豆男さんは驚愕の顔で彼女へと詰め寄る。

対する彼女はいかりに振つ向や、田でなんらかの合図を送つて來た。

なにを伝えたいのかはさっぱりわからないが、とりあえず命だけは助けてもらえるように視線で返す。

すると、彼女は豆男さんの方に向き直つて、恥ずかしそうにぬいぐるみで顔を隠しながら、ぼそりと言つた。

「あの、一人だけの秘密だから」

いつなつたら本当のこと話をしても生き延びるしかない！そ

う思つた将だつたが、さつやう時既に遅しだつたよつだ。

死刑宣告を進言した彼女の言葉を聞いて、豆男さんは真つ先に手を叩いた。

パン！ つとこつ音が鳴り響いたと思つたら、次の瞬間、車から降りてきたムキムキマッチョのお兄さん達に囲まれてしまつていた。

そして豆男さんがリーダーのよつこ一歩近づいてくる。

「何か、言つことはあるか？ 小僧」

「ちよ、ちよと待つてください！ 誤解です！ 僕達何にもしてません！」

「ほお、じゃあ保健室でふたりつきりの秘密つて何なんだ？ ああ？」

「や、それは、ええと、なんて言えばいいのか良く分からんんですけど、とにかく！ あなた方が考えてるやつなことはしてこません！！」

「信じられるが！ お嬢見てえな美少女と一入つきりで、ムラッといな奴なんているか！」

そ、その発言はびうなんだ？ と思つが、怒り心頭の豆男さんは、おそれく句を言つても信じじてもうえなさうだ。

な、なんとか良い誤魔化しを思いつかないと、そつだ！

周りのヤクザの方達と田舎を合わせないよつこ、将は今思ついた
名案を答える。

「これで、どうだーー！」

「俺、ロジコンじやないですかーーー！」

「てめえーーー お嬢に魅力がないって書いてえのかーーー！」

「いいえーー 魅力いっぱいですーーー！」

「ダメでした……」

「ほあ…… やっぱり…… 覚悟はまだできてるんだろうな。小僧

といっかますます怒らせてしまつたよつで、豆男さん＆ヤクザの人達が、指をポキポキならしながら、すこい顔で迫つてくる。

何か逃れるすべはないかと模索するが、何も思い付かない将。

「このままでは…… そうだ彼女はーーー？」

「えへへーーー！」

結果・ぬいぐるみに顔を埋めて照れていた。

その瞬間将は悟つた、自分の終わりを

最後の希望を胸に、将は豆男さんの横から彼女の様子を窺つ。

いつの間にか豆男さんの手が、除々に首元に近づいてきて、掴まれたと思った次の瞬間。

ドオオオオオオオオオン！！ という爆発音が、将の後ろから鳴りひびいた。

保健室をさんざん荒らした静香達は現在、将が他の女と学校を出た事を知り、将を追いかけ、再び外を走りまわっていた。

「それでG、あなた本当にお兄様の居場所はわかるんでしょうね」

さすがの静香でも、外でお兄様の匂を辿つて探すには、少しばかり時間を食つてしまつ。そこで今回は、Gがお兄様を探す役目となつた。なんでもなにか策があるらしい。

「ふん、私はKみたいな野生的なやり方ではなく、確実なデジタル的なやり方だから、心配無用」

そういうてGは鞄の外ポケットから音楽プレイヤーを取りだした。

「何をしているの？」

「黙つて見てなさい」

イラッときたが、今は仕方ない、お兄様を見つけるためだ我慢する。

拳を強く握り閉めて怒りを抑え、改めてGの取り出した音楽プレイヤーに手をやると、彼女はピピッと機械を操作した途端、突然音楽プレイヤーにアンテナのようなものがつきました。

「まさか、発信機？」

「人間の発明品は有効活用しないとね」

Gは見せびらかすように機械を見せつけてくる。

「いつ、いつの間にお兄様に発信機を、でもお兄様の身の回りのは毎日チェックしているし、一体どこに

と考えだした瞬間、すぐに答えは導かれた。

毎日欠かさずお兄様の物をチェックしている私の目をすり抜けて、お兄様に発信機を取り付ける方法など、考えてみれば一つしか存在しない。

それはすばり、食事だ。

おそらく食べ物の中に小型発信機でも詰めておいたのだろう。この方法なら、静香に見つからず、将に発信機を取り付けることが可能。

Gのことだ、お兄様に危害がない発信機を飲ませたんだろうが、油断も隙もあつたものではない。

「どのくらい離れている？」

「そこまでもないよ、今の速度なら、あと2分くらいで到着する」

だが今回はその発信機のおかげでこうして追いつくことができるのだ。今回ばかりは大目に見て上げよ。」

そういう考へてゐるうちに静香の嗅覚も機能し、お兄様の匂いを察知した。だがそこで、静香は一つ違和感を感じた。

お兄様と雌一匹以外に、複数の下種男の匂いを感じとつたのだ、そこで、少し前を先行していたGが発信機をポケットにしまって、言葉だけこちらに投げかけてきた

「そここの角を曲がった道の先にいるわ」

「そのよつね」

静香は匂いを気にしながら、Gに続いて曲がり角を曲がった。

そこで一人が目にしたものは……

「あれは……！」

「将君！？」

複数の黒服の男どもに囲まれてゐる将の姿だった。

黒のベンツが横向きに置かれているため確認にじづらいが、間違いない、お兄様だ。あの黒服の傍に

いる雌が気になるが、今はお兄様を助けるのが先決。

「Gー」

「わかつてゐー」

おそらくGも同じ」とを考えていたのだろう、左右に分かれて速度を上昇した私達は、互いに視線を一瞬合わせる。

それを合図に少し右前を走っていたGがベンツの前に飛び乗つて、エンジン部分にパンチを叩きこみ、すぐに離脱。

ドオオオオオオオン！ と少し派手な爆発を起こして燃え始めるベンツ、それに気付いた全員がこちらへと視線を向けた。

「な、なんだお前達ー！」

今のは最優先事項は、お兄様の救出、こいつらの排除は後回しだ。

静香と凜は、掴み掛かってきたヤクザの顔を踏み台にして将のところまで飛ぶと、一人で将の両腕を掴んで一気に後退し、距離を取る。

「大丈夫ですか！？ お兄様！！」

「将君平氣ー！？」

「あ、ああ、うん、大丈夫」

どうやら手を出される前に救出できたみたいだ、良かった。

べたべたと将の体を触り怪我がないことを確認して、二人はほつと胸を撫で下ろし、ゆっくりとヤクザたちへと視線を向ける。

残りの数は11人、こちらを半円の形で取り囲んでいる。それに対してこちらは二人、普通に考えて状況は最悪の展開なのだが、

「G、あなたは左」

「それじゃあKは右」

二人の目には、殺意と怒りの色がしつかりと現れていた。

震・ヤンされ……ヤクザ……（後書き）

ずいぶん久しぶりの投稿です、これからもよろしくおねがいします

す

震・ヤンされ……罰?…

現在将は、自宅の自室で正座をさせられていた。

理由はもうらん

「さあ、お兄様説明してもらいましょうか?…」

「あの子とはどういって関係なの? 将君」

尋問です。

結局あのあとどうなったかと言つと、炎上したベンツが原因で、すぐに市民の味方であるパトカーが参上してしまったので、将達は面倒になる前に逃げてきたのだ。

いやああの時の静香達は、マジでやばかった(相手が)ので、正直助かつたと思つてゐ(法的に)。

そして仲良く三人でうちに来て、玄関でロープで縛られ、部屋に連れて行かれ、こうして一人に

「速く吐いた方が身のためですよ? 将さん?」

ではなく、三人に尋問をされているという状況だ。

「つひちょっと待つて! なんで千鶴さんまで自然にそっち側にいるのー?」

しかも今日の出来事知ってるみたいだし！

そんな将に対し、静香が腕を組んで田を細めた。

「お兄様？ 今はそんなことを聞いているのではないですよ？」

「やつだよ、ちやつちやつあの雌豚、こべいんじ、こえ生い」との関係を教えて」

「言つて直してどんじんひじくなつてゐよー？」

とこづかついて生き物ですらなくなつてゐよ。

アイドルの時に凛に何かあつたのだつたか？ 言ははいんないと言つ子じやなかつたはずなに、

幼馴染と義妹の言動の悪を考へられながらも、これ以上長引くとまことに察した将は、大人しく保健室であつたことを説明した。

「……とこづわけで、彼女には保健室で縛りあげられていたのを助けてもらつただけなんだよ」

「……ではあの黒服の男達は一体なんなんだつたんですか？」

「それは俺もちよつとわからないんだよ。でもずいぶん懷いていたみたいだし、向こつもお嬢つて呼んでたくらいだから、身内ではあると想つただけど」

「そう、静香の言つとおり、結局あの黒服の男達がなんだつたのかはわかつてない。」

そんな尋問の中、一人大人しく話を聞いていた千鶴さんが手を挙げた。

「あの、その人達はベンツに乗ってたんですね？」

「はい、そうですけど

「お母様、何か知ってるの？」

「はい、たぶんその方達は、大石財閥の人達ですね」

「大石財閥！？」

それって誰もが知ってる、あの超金持ちのことか！？

将が目を見開いて驚く。

無理もない、大石財閥といつたら、テレビに出る程有名な金持ちだ。

「ああ、ついでに近辺に住んでるつてお母様言つてましたね」

「マジですか！？」
千鶴さん！「

「ええ、あら？ 将さんは知らなかつたの？」

千鶴さんが不思議そうな顔をして聞いてくる。

「いやあ、バカでかい家があるとは聞いていたんですが、実際見た

「とにかく

確かに一時期学校で噂になっていたこともあつたけど、そのころ
ちゅうビゲーセンにレッドファイトが稼働していたため、それどころではなかつたのだ。

「ということは、あの生ガミは大石財閥の子つてことね」

「あの黒服共の呼び方から察するにそつなりますね」

あれ？ さてよ？ といふことは

「もしかして俺達つて危ない？」

だつて俺は色々と誤解されちゃつてるみたいだし、静香達もベン
ツを破壊したりしてゐるし……

そんな将の問いに、静香と凜が当然のよう答える。

「もしかしながらも狙われますね」

「間違いないね」

「それって色々とやばくないか？」

「大丈夫ですよ。お兄様は私が守りますから」

「大丈夫、将君は私が守るから」

それは男としてどうかと思うところがあるが、この一人に守られ

たら確かに平氣な氣がする。

だが「ひらは平氣でも、相手側の被害が甚大ではないものになりそうだ。」

将がそんなことを考えていると、千鶴さんが手を挙げた。

「そのことに關しては私がなんとかしておきますから安心してください、将さん、あ、ついでに静香達も」

「ついで、ですか」「ついで、ねえ」

まるでおまけのような言い方に、一人の視線が千鶴さんを捕える、が、たすがと/orべきか、そんなことをまったく気にせずに、千鶴さんはにこにこと笑顔を向けてくる。

「あ、ありがとうございます」

「いえいえ、気にしないでください、未来の旦那様の頼みですもの」

「つーーー」

突然なに言い出すんだこの人ー！

千鶴さんのさりげない一言に将が思わずふきだした。

しかも、言つた本人が恥ずかしいのか、顔に手を当てながら頬を赤く染めていた。

そんな仕草に、将も釣られて顔を真っ赤にする。

「『じつほん』ではその件に関しては、お母様に任せるとしましょ
う」

「おほん！ それで構わないよ」

一人がわざとらしく大きな咳をしながら、千鶴さんの案に賛成し
た。

「そ、 そうだな」と将も賛成に一票を入れる。

けどどうやってなんとかするんだろう？ と疑問が沸くが、気に
しないでおこう。きっと大石財閥に何かしらの繋がりがあるので
う。

まあ何はともあれ、俺の無実は証明した。これでようやく誤解が

「さてと、 それじゃあどうしましょうか」

「そうだね」

解け

「「お兄様の罰」」

てな―――い―――

久々に見た静香と凛の嫌な意気投合に、将は冷静に、

「あの一人共？ 誤解だつてわかつてもらつたんじや……」

「はい、お兄様の言つてこなことは全て理解しました」

「でも、将棋があの女と一緒にいたのは事実」

「「よつて罰は逃れられません」」

訂正、誤解は解けても、あの子と一緒に居たために、俺は罰を受
けなければならぬいらし」。

ふざけるな！ やんなんじや何言つても意味ないじやないか！

すぐにでも抗議すべきことだが、残念ながらおそらく俺が何を言
つても罰は逃れられないだう。

「……

将はちらりと千鶴さんの方に視線を向ける。

きつと千鶴さんなら、この絶望的状況を打破できるはずだ。ここ
はお力を借りる他ない！

そう考えた将は視線で千鶴さんへと助けを求める。そしてそれに
気付いた千鶴さんは、笑顔で返して、

「どんな罰がいいかしらね～、ふふ

悪魔の発言を漏らしていた。

終わった……もつ駄目だ……

将は、ははつと乾いた笑みを浮かべる。

唯一の希望は、絶望へと変貌してしまった。これではもつ助かる道はない。

手足を縛られた状態では、彼女達から逃げられるわけもない。将はただただ、目の前でどんな罰を与えるかもめている三人を、見ていふことしかできないのだった。

あれからじれぐらじ経つたか分からぬほど時間が過ぎた。

「お兄様、起きてください」

「ん、あれ、俺寝てた?」

「はい、それはもうぐりすりと」

じゅやら絶望のあまり眠ってしまった。外はもう夕方色の空に変わっていた。

「それで将君、罰のことなんだけど」

「これを」

そう言って千鶴さんが3枚の紙を降り置んで地面上に並べる。

「これは？」

「三人がそれぞれ用意した罰です、今回はお兄様が選んだ一枚を罰にさせてもらうという形になりました」

つまり三人の意見がまとまらないから、それぞれを準備したつてことか。まあ三人の意見がまとまるとは考えてはいなかつたけど。

将は納得しながら、目の前の床に並べられた3枚の紙を見る。その時将は、自分の体を縛っていた縄が外されていることに気がついた。

とは言つても、逃げられる気がしないので、特に現状は変わらな
いんだけどね。

さて、そうなると、この三枚から一枚を取りださなければならぬ。
嫌な予感しかしないが、考えていても仕方がないのでさつさと一枚
を取つて、書かれていることを確認する。

「えーと何々、今日から私のことを千鶴と呼び捨てにする」と

つてあれ？ こんな簡単なことでいいの？

もつとすごい罰が待っているのかと覚悟していた将は、正直拍子抜けした。

「あの、ire千鶴さんのですよね？」

גַּתְּתָה, מִלְּמָדָה

「えっと、こんな命令でいいんですか？」

「あー? もうとすぐ命令の方が良かつたかしら?」

「いいえ、これで良いです」

まあ本人がこれでいいなら別にいいか。

「ではわたくし」

「あ、はい、千鶴?」

「は」

将の言葉に、千鶴さんが満面の笑みで返してくれる。少し恥ずかしくなった将は、赤くなった頬を軽くひっかくのだった。

「なんだか、やつぱり少し恥ずかしいな……」

「わつ? 私はうれしいですけど」

今までさんづけで呼んでいた人を呼び捨てにするつて、簡単なことだらうと思つていたけど、意外とこつぱずかしいものなんだな。そう考へながら、将は千鶴さんの笑顔をから顔を背けた。

すると顔を向けた先に、静香と凛が（将の）ベッドの上で頃垂れている姿が目に入った。

「わつ、ひどいです兄様……」

「裏切られた気分だよ……将君」

「お前、何をいつとるんだ」

よっぽど俺に罰を『えたかったのだろうか、そういうえばこいつらの罰はなんだつたんだ?』

少し気になつたので、前に置かれていた残り一枚を広げて、

婚約

結婚

ぐしゃっと握り潰して「ミミ箱に投げ捨てる。

本当に千鶴さんをひいてよかつたと、心から実感した将であつた。

震・ヤンされ……罰?…（後書き）

やつぱん感想とかもりいつと書く『反』がおそれますねー。 読んでくださいって
方々に感謝です。

特別編～温泉へGO～（前書き）

久々の更新です。こないだ温泉いつたこともあって、今回は300人お気に入り突破記念で、書いたのですが……

特別編～温泉へGO～

現在将たち桐ヶ谷一家、富代一家は、家族全員でお出かけ中、その先とは……。

「お兄様、温泉楽しみですね」

「……ああ」

将は少し表情を濁らせて返事を返した。

現在将達一行は、山梨にある温泉、鐘の山苑に向かって車で移動中なのだ。

「なんですかお兄様、その間は？」

「いや、特に深い意味はないぞ」

ふくれつ面になつた静香をたしなめるようにひつと返す将。

正直将はこの温泉に行くことがあまり乗り気ではなかつたのだが、理由はもぢりん、

「あ～、お兄様と一緒に温泉に入れるなんて、夢のようです……。

「あの、いつとつしてるとこ悪いけど、俺お前と混浴なんか絶対入らないからな？」

「えへへへー。」

「えへへ、じゃないー。」

将の返答が予想外だったのか、静香が心底驚いた表情を作る。その時、前で運転している静香の母、千鶴さんが話に割り込んできた。

「静香、あんまりふざけたことを言つもんじやあつませんよ」

「お母さん……」

さすがは千鶴さん、娘の不埒な言動に鋭く注意する。これが親の貴祿という奴だろうか。

さすがの静香も、母親に注意されてか。押し黙ってしまった。

「そんな年になつて男性と混浴とは、ましてや義兄である将さんとなんて、許されるはずありません」

「うんうん

千鶴さんの言葉に同意を示すよつこ、将もつねずく。

「それに、将さんと混浴に入つていい権利を持つのは、母親のかわりである私だけです」

「せうせう、つてそひづやなこですよ千鶴さんー。」

「えへへー」

「だから『えへへ、じゃないですかって！』

訂正、貫禄など微塵も感じられなかつた。

といふかさすが親子、行動が先ほどの静香と類似している。

——はあ、だから来くなかったんだよ……

もうおわかりいただけただろうが、将が温泉に行きたくない理由は、静香達がいるからである。

だつてどう考へても何らかのトラブルが発生するに違ひないから、それでも将が温泉に行こうと思つたのは、

「お兄ちゃん、温泉楽しみだね！」

「そうだな、実」

実が行きたいと言ひ出したからだ。最近あんまり遊んでやれなかつたし、弟の頼みとあれば兄としては断るわけにはいかないからな。

「一緒に露天風呂も入るつね！」

「おおー、おちおちんだともー！」

車の中で元気にはしゃぎ回る実を見て、将は頭をなでなでしてあげる。

ああ、やっぱり実はいいな

実のかわいさについ惚けてくると、車内の空気がピコピコとしていることに気づいた。

近くを見ると、静香がジト田でじかに見、バックミラーから千鶴さんもジト田でじかに見ていることがわかった。

「お兄様・・・？ 私達の時とはずいぶんと反応が違うありませんか・・・？」

「違うつてお前、別に男同士なんだから問題ないだろ」

「男なら別にこいつてこいつなんですか？」

「いや、だつて温泉で男同士、女同士で入るとこひだり」

将が冷静に正論を答えると、静香が身を乗り出した。

「それは今問題となつてこいる男女差別発言ですよー。お兄様ー！」

「いやー、全然関係ないからー。一般発言ですからー。」

「これは言こ逃れできませんね。将さん」

「ちよつと千鶴さん、それっぽくいつのやめでくださこよー。むしろ言こ逃れしかできませんよー。」

「なら弟妹差別ですねこれは」

「勝手に変な差別作るなー。」

「いじえ、弟妹母差別ですよ」

「だから千鶴さんも乗つてこないでくださいー。」

こんな感じで、将達を乗せた車は温泉へと向かつていったのだった。

「ここが鐘の山苑か……」

休憩を挟んで車で1時間半ほどで、将達は田的池の温泉へと到着した。

車を旅館の正面へと止まると、仲居さんの人であろう和服を着た女性が、複数人かけよつてきた。

そして車から出た将達を確認すると、一人の仲居さん以外の人達が、車から荷物を丁寧かつ迅速に運び出していた。

へえー、今は荷物を持ち運んでくれるものなのか、すいこな

将が仲居さんの働きぶりに関心すると、のこつてこた仲居さんが深くお辞儀をしてきた。

「よくぞいらっしゃいました。本日は旅館・鐘の山苑にお越しいただきました誠にありがとうございます」

「い、いえ！ じつは……」

「あ、ありがとうございますー。」

あまり温泉に来た経験のない将と実は、慌てた様子でお辞儀しかえした。

まさか返事がくるとは思わなかつたのだろう。仲居さんが一瞬驚いた表情を見せたあと、「いいえ」といつてすぐに優しそうな表情を作つて、旅館へと招き入れてくれた。

「……でつか……」

旅館に入った途端、将はおもわず子供みたいな感想を口に出していた。

しかし将が驚くのも仕方ない。なにせ入口のロビー、フロントだけでも、学校の体育館と同等を程の大きさはある。

もちろん広いだけではなく、装飾、設備も行き届いているのが良く分かる。

全体的に和をイメージした旅館なのだろう。フロントに置いてある像は、石製ではなく、全て木製で作られており、生け花なども飾られている。

さらに驚きなのは、旅館の中に川が流れているところだ。川のあるところには小さな橋が備えられており、旅館の中でも自然を強く強調している感じがする。

それに旅館に入つてすぐ正面に、音楽でもするのか、大きなステージまで備えられている。更には至るとこにソファーはテーブルがいくつも設置せられており、正直圧倒されてしまった。

「じゃあ私はチュックイン済ましてから、将さん達は向こうでも座つて待つてもらえる?」

「あ、は、はい」

千鶴さんはそれだけ言い残すと、仲間やんと共にフロントへと向かつていった。

「お兄様、あちりに腰掛けましょ」

「ああ、そうだな」

静香が穏やかな表情を作りながら、端にあるソファーを指す、特に断る理由もない将も、頭を縦に振る。

一人でソファーへと腰かけると、緊張していた心が放たれたように、ふうっと軽くため息を漏らしてしまった。

「ふふつ、緊張はほぐれましたか? お兄様」

「ああ、なんとか……」

「そんなに緊張しなくともよろしこんですよ~」

「まあ、それはそうなんだけだぞ」

静香の意図とおり、泊まりに行く客が緊張する必要はないのだが、旅行自体数回しかいったことがなく、しかも自分の知っている温泉とは違う雰囲気に、つい緊張してしまったのだ。

「ほら、お兄様、実君だつてあんなに元気ですよ？」

確かに、視線を少し外に向けると、フロント内を走りまわる実の姿目に移った。

所がまわすおいてある像などに触れたり、川を触つてみたりなど、その行動は子供っぽいといひが成立つ。まあまだ子供なんだけれどね。

それにしても

遊びまわっている実、なんて可愛いんだろうか。これはもうあれだ、キーホルダーとかになつたら大人気間違いなしの愛らしさを持つていても過言ではないと思つ。

「お兄様」

「んあ？」

「顔がひどい」となつてますよ

「まじか」

将は言られて慌てて顔を両手で挟む。

どうやら実の可愛さにあてられて顔が緩んでしまったようだ、今

度から『気をつけないと……』

静香のジト目を避けていると、チョックインを済ませた千鶴さんがやってきた。

「とりあえずチョックインは済ませたから、これからみんなでここにこもるしょ」

そう言つて千鶴さんが手に持つていた紫色の和紙をテーブルに並べる。

「茶室、清流冠？」

「お茶？」

千鶴さんのもつてきた紙には、達筆な字で茶室清流冠と大きく書かれていた。

「や、せっかくだし、みんなでいってみない？」

こんなもんまだもらえるのか。と思いつつ、将は賛成に一票を入れる。

「いいですよ」

というかそもそも将と実は連れてきてもらつている身、賛成もなにも千鶴さん達の行きたいところには付き合つのが道理だらつ。

それに茶室なんて入ったことないし、正直少し興味もあるのだ。

すると静香もすぐに答えた。

「私もお兄様が行くのであれば異存ありません」

「じゃあ、決まりね。実ぐーん！ 移動するわよー！」

「はーーーー！」

「ではお兄様、参りましょー！」

「ああ」

「ひして将達は茶室・清流冠へと足を向けたのだった。

特別編～温泉へGO～（後書き）

2日間を書いしつと思つたが……なげえ！！
といつわけで続きは……わかりません！　すいませぬ！

震・ヤンヤれ…十羅の朝…

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

んつ……

昨日散々説教を食らひた将は、飯を食べてからベッドに潜り込んで眠りについていた。

♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪♪

あれ？ もう朝か？

昨日色々と動き回つたせいか、体が中々布団から出よつとしない。

今日は確か十羅口だつたはず、となれば一度寝してもなんの問題もない、眠い頭でそう考へた将は、むつ一度闇の中くと意識を飛ばそつとして

「…………」

「…………」

飛ばれつとして

「…………」

「…………」

変な視線を感じた。

パチツ

「……何してるんだ？ 一人共、……」

田を開けると、自分と同じ高さにしゃがんでる顔が一つ並んでいた。もちろんその一つは、

「お兄様の寝顔鑑賞」

「珍しく右と同意」

この妙な所だけシンクロする静香と凜だ。本当は仲がいいんじゃないか？ と思う程のシンクロ率をほこる一人だが、当人達に言つたら確実に面倒くさい事件が起きそうなので黙つておこう。

それによく見ると、二人は普段過ごす服装ではなく、外出用の服、お出かけ用の服を身に包んでいた。しかも目ざましが鳴つたということは現在朝7時、学校もないのに一人で外出だらうか？ 本当に珍しい。

普通の男子ならこの一人のおしゃれを前にして平静でいられるわけはないだろうが、いつも一緒にいる上に、まだ少し眠気が残つている今の将には、効果は薄かつたみたいだ。

「どうか一人で出掛けれるのか？」

「何をいつてるんですかお兄様、3人で、ですよ」

「3人?」

「ま、それはまた珍しい、俺の知るなかでも、静香が自分以外と出かけるなんて数えるほどだ。しかもそのほとんどが千鶴さんと、

学校の友達か何かか?

「まあいいや、なら気をつけて行ひにいよ。俺はまだ眠いから今日は寝てるわ」

それだけ言って、将はおやすみと寝返りをうつ。

すると今度は凛がくすくすと笑いながら言った。

「もう、まだ寝ぼけてるの将君、三人田は将君だよ。」

「あ?」

何を言つてゐるのかねこの子は? 今日は一日中寝るといつ推考な計画があるのだ、そんなものに付き合ひほど暇ではない。

「まさかとは思ひますけど、お兄様、約束を忘れてはいますか?」

「約束?」

「そんなのあつたか……?」

「まひ、将君。この前のレッジファイトの時だよ」

……思考中

「あ
……」

凛に言われて、よつやく思って出す事ができた。

やういえばそんな」ともあつたな。最近色々なことに巻き込まれて「タタタしてたから、歸れても無理はない。

「思ひ出しましたか?」

「ああ、確か『テート……だつたよな?』

「「はいー。」」

将の言葉に、一人が満面の笑みを作つて返事をする。

が、せつかも言つたが、最近ずっとタタタして忙しかったため、体が疲れている。そんな体でこの一人と出かける……考えただけでも疲れてきた。

「なあ、悪いんだけど今日は

「却下」

「拒絶」

「疲れてるから、つて否定すんのはええよ……」

将の案は提示される前に否定されてしまった。

せめて全部言わせてくれよ。

「今日ははずつとベッドの中にいたかったんだけど」

「あ、と溜息をつきながらぼやくと、それを聞いた一人が予想外なことを口にする。

「私はお兄様がそう望むならそれで構いません」

「私も、将君がそうしたなら今日は我慢するよ」

それを聞いた将は、

「え？ マジで？」と素で驚いた表情を作る。

「ううう」とだ？ さつきはあれだけ最速に断つておいて、今度はOKとは……まあいいか、とりあえず今日ははずつと寝れることになつたんだ、素直に喜び。

将は細かいことを考えるのをやめた。

「悪いな、二人共」

一人に感謝を述べながら、ふかふかの掛け布団を被り、

「いいですよ、ただ

「初めてが3Pなんて」

「さー、どう行くか

すぐに払いのけた。

危ない危ない、こいつらに掛かれば俺の貞操なんてあつという間にもっていかれてしまう。

気を引き締めるため、将は顔を両手で叩いて目を覚ませる。

「んで、今日はどうか行きたいところとかあるのか？」

本当は一日寝ていたかったけど、自分で撒いた種だ、今回は仕方ないので付き合つてやるとしよう。まだ貞操は失いたくないし。

「私はお兄様とならビニでもいいんですねか……」

「私も特には……」

「ふうん、まあいいや、俺着替えるから、その間に下で一人でビニに行くか決めといてくれ」

一人は互いの顔を睨むと、「わかりました」といつて一緒に部屋を後にする。

あの調子なら行き先が決まるのに1時間くらい掛かりそうだな、まあでも一応服は着替えておくか。

将はもう一度大きな欠伸をすると布団から出た。すると机の上に服が一式綺麗に置かれていた。間違いないあの二人の仕業だろうが、自分で服を選ぶ手間が省けたので、大人しくそれに着替えておくことにしよう。

持つていくものは、ハンカチ、ティッシュ、携帯に財布、これくらいか。そういえば財布の中身、今やばいんだっけか？

思い出した将は、ポケットにしまった長財布を開けて中を確認してみると、諭吉が一枚と、小銭が少量。

これじゃあ心もとないな。あとで諭吉さんを増幅させておひつ。

普通に遊びにいくならこのままでも十分だが、相手はなにせあの人だ。どうなるかわかったものではない。

そうなるととりあえず銀行かコンビニだな、と考えた将は部屋を出た。

瞬間

ガシツ

「ああ、行きましょうお兄様」

「え？」

ガシツ

「行こう、将君」

「え？」

なぜか待ち伏せていた一人につかり、そのままずるずると玄関まで引っ張られる。

「ま、待て待て！ どこいくのか決まったのか？」

「はい」「うん」

返事をしながらも二人は引っ張るのをやめない。

将の予想ではもつと時間がかかる予定だったんだが、どうやら違つたようだ。

「わかったから！ せめてビビ行ぐのか教えてくれ！」

二人に引っ張られ、転ばないよう注意しながら将が説明を求める
と、一人は尚も将の腕を引っ張りながら、綺麗に声をはもらせ、言
つた。

「「「デパート！」」

震・ヤンでれ 土曜の朝…（後書き）

皆様おひさしひぶりです。さて今回は本編に戻りました。

特別編の温泉編は、お気に入り数が50人増えた」とに公開していますかと思います（ふふふ）

さて今回は読者の方に3つ報告があります。

1つ

これから活動報告をなるべく毎日更新していくかと思います。まあ更新などの報告を含めて

2つ

新人賞に出そうと思っている作品を、検索除外で投稿しようと思いまして、読んでみたいという方はURLを載せておきますので、感想をいただければ幸いです。

URL
<http://ncode.syosetu.com/n3376/>

3つ

この作品、またはヤンでれFの表紙、挿絵を募集したいと思います（願望）。友人が書いてもらっているのを見て、すごく羨ましかったのと、キャラが想像しやすいためです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8482k/>

ヤンでれ...

2011年10月6日13時00分発行